中村俊定文庫
文 庫 18
992

中村俊定

書天堂一叟の著編なるべし　同人の花間集があり

早稲田大学図書

冬の日

笠は長途の

性

[illegible]哀を見るとかく文の[illegible]之

元政か[illegible]

侘[illegible]死[illegible]

蛾[illegible]

哀を見る

[illegible]極に似たり

昔狂哥の才士此国[illegible]

狂哥の才子は竹斎なるべし　彼か独[illegible]竹斎[illegible]

[illegible]人の知[illegible]

扁鵲[illegible]

[illegible]の[illegible]

中村俊定文庫

水口

又鹽田にて
貴賤ともに老いて消の世は みな白骨鹽田となり
大仙のまへにて
ゆふけむり白きを見て雲もまきれぬ煙なり大仙か
茶毘のまへにて
西の入日にけむり ふとみな[illegible]仙の山もまたむす

東金七郎披

鵜の来ぬ木の身ハ
翁曰
此句貞享元辰のとし鹽田にて行し一説[illegible]有[illegible]と此説[illegible]
又説此[illegible]の名の初日の[illegible]より[illegible]と[illegible]
[illegible]とかく云へり[illegible]此五巻[illegible]
穐老冬の果[illegible]一説にみな[illegible]の[illegible]矢の目と云[illegible]
翁云此説よ[illegible]の[illegible]とまの[illegible]
五畫云 文ハ此[illegible]も風の身と[illegible]所[illegible]風[illegible]せず
して[illegible]と[illegible]心を付つきか 虚実自在の場也
似たるものとまて[illegible]此句の説也

一

翁云 鵜の二字の[illegible]人[illegible]の外[illegible]風の身ハとよみて[illegible]
[illegible]しと又ハ此句の[illegible]調[illegible]記し鵜のと[illegible]其説の[illegible]
五畫曰 意也
翁云此句[illegible]の[illegible]と云ハ其[illegible]
[illegible]と云ハ[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]を見るに
斯[illegible]何[illegible]と云[illegible]
[illegible]の[illegible]一首[illegible]之[illegible]
下の[illegible]
又
[illegible]の[illegible]
[illegible]日[illegible]
又[illegible]
[illegible]
又[illegible] [illegible]の水[illegible]

二

其よく言 かるみせられし諸生 みなよく其蕉門の俳風なとは
去鉢史と書き著し 地図の立色景画中 危険
又くみし 輪する 嵐雪と 蕉ししするも 其流行の妙用を
知るべし

是嵐雪曰 其角が 蕉風にあまり累し 世の関に立ては
こまかに多く言ふきかたきあかりしの言
然るに より後の風の句也とりと云は 記者の風へより
途するすは 風のあいと云る 予其後の其如ナり 似る
抄と述懐しける 数年俳諧に一句あり 此は留まるぞ
分世舎りて玉の伝也

許やとよもしる かきの山家也
外ち 然るに 許やともしるとすみてよむもあり 大之開けて
よむときは 其のかしき去りし まへてなといふる
の留り あさきものを 留りを保てよむは あはれも留
りあるものを すみを読へし 此の正本の留り

暁臺曰 上方もにはい 京の人 林の出ずるは 卅を立てて 春の 又 の時 花を云き

有明並け より吉田 不也 終日 付かいし 口伝
其六後 集の京 と すべし

てありやはりと申しると留りてよむべし
佛仙士朗暁臺蕪村 皆旧意
句意 然れは 誹とうけとは立る山家花の
乱 ちらうちて 春て立するもあはれ 薄
立の字あるべし
有明の見れ
外云 然有明は 氷の名を冠せる よく又何か
は作者の と 此の 妙す
して一句 信倚り とも 是は
花の よく みりたる
其云 附りし 山家花の風雅人の たるし
京都 隈に有明 と云る
有明 の 見せつけ しけれは 也しなり
是 有明 の あるを ていふ し の
水と作り 風の と作れ 此 の風調 作者の
ありけり

頭の露をふるふあかむま

此ハ前句を附来りて ふるふといへるハ 前句を下

して着たるを世をはやすあかむま 一句の姿

朝鮮の細すゝき

釈 是とてもわりなき風情のすゝき作者の人をもあはれとさはれ

こしは何ぞの比より是ハ[illegible]なりけるなるべし

作りなしたるさまハさびしけれとなるべし

正 然の日ハ其時の風俗を余へ[illegible]解すれ 惟ささ

とりつくろひたると解すべきともあるべくなし

稲かりも米取るとふる有明酒なとこそらへの類ぞ

一句の姿を解し

日のちりちりに野に米を刈

釈 附意ハ前句の[illegible]を云ふ 毎ハ秋かぎりなく

とりて米刈と云ふ詞を動かして日のちりちりと作るべし

我庵ハ鷺に宿かすあたりにて

釈 此句庵の荒果たる様よくいへり 鷺を宿かすと答のさまを

[illegible]鷺に宿かすと作りたるハ文章のあるさまを愛し是を隣る

身すがらといふハ風情なし 其巻の十句の文章を評

して

ねはさかの常にみなハ隠逸人の風の手業を

髪はやすまをしのぶ身のほど

氷 ある頼人と呼の所なる[illegible]ハ遁世せる人に對して

其前ハ思ひよる所也として[illegible]まかせるなるを

四

外六は後句を見ての評の誤也
〇天保写本 其人とし 芝年の例

評
みのほとに付たるなるへし
是は外六の深入の抱き寝るに常盤あたりまて髪の
延る者従はると云るの表明かに其人を見て出へし

いつはりのつらしと乳を
去
去は前句の髪もせし人を尼となして付たり其女は思
ありしに深く契りし人は又ある女ありて其妬深く互の
父しく剛ひつみて後都て男の為に操と伸入ります
かされ離も思ひて幸の髪を剃たれとも其実は佛と為
て今は口惜しと親に乳をしほり捨たる

向附は外六も全し
〇天保写本 有るる女と見ての附なし

評
是も外六の深入に余りてひつかし これは髪を切せし人
又さし向ひたる女也思ひ立道中の契りを出家する迄哉
切て思ひたる事を引て見れは思の外髪はやすまずまま
ま見て出家するなん偽りのつらしと愛子の乳も去
りけり捨る親主の姿なし

〇今
今秋

濱の西東都 淡
米 乳を絞り捨ると云ふ 継子失ひたる嘆し 一般の猶し
へ悲歎するなるへし

評
其人は独り継子と恨みぬきいつはりのつらしと云を
姿なし 唯乳のみ之に侘と云る契りしその称有
一し乳を絞り捨てて子を別れてるかへる哀をのべ
たり 前は生別 是は死別と見替ての趣面白し

新法の嘆
米 御家宗と付たり 寒しと言子またてし云佐と合はせ
新法のうつりらる

あらし八貫子
嘆言はさ体より貫家の ... と思ひませか京は
四 朝空しくしてかく家向ふとふる相

臨時の祭なと　弥[illegible]が使もかくやあらん
田中ちま
外柳原には
伊[illegible]近江
関の山一ヶ月　素名十日
小一ヶ月餘也
御方は舟引人
柳は舟近く付
此前は河にふれは舟は難[illegible]付けたるし
萬里を接す

舟引人猿ず　技は無し
御さかしき
さかしきは猿がきも　昔は舟着廿ト有りし　日毎
朔日
十重
より見れよせたりや
二の尼は
是は官仕せし人の下りたるし
一ノ尼中納言より番人宰相年月四人舞式者歌人番人
已上二ノ尼三ノ尼
仕立は二ノ尼は我勤ける折の近所の者にて宇様さ
大宮め院に宮仕ける宮女席次ありて一ノ尼二
尼は近所には見えとよび習し
近衛の陣比の一つ場の近し
時は萩は

外、衣は新裾其内をへつして膝は裃をと云ささまゝして
おうと内着の附せ瑕緞子商の人のあらし着る
たつ可くかきくどくるいらへも出ん性裃の裾いと斗
渓らみ鼻丼也ほ体し
浮世之ほ鼻丼也い

季節
外 是は前名の人にして其人のくふみを定は裃と
着は何の性するねと上着と見え所より出すくと
云は其拵ゆる也

五 是は祝着変化十躰の気質の仕方之近松のむきくい
気世此出す其いい段也

今も昔の
出揃の段あまさし留て然と放つの付之 花山の陸
白の四君子西ひあらしを内存伊周の御地家来を
放ち留し落し仰る仰より

盗人の
子おうの語物より越後物狂人の状なとく見ゆまて
吹折れしいうのとりをやしこ二るのくつりとこし

志すし 宗琥
是は對付之越後の松と宗琥の水は皆浄瑠璃すみ
若二るの掾作きを都子播磨の相ひと宗珉林
には丹波郡上郡山田の吉湖川の初より有と七郎披也
出来り
如見いえの上東西ヶ

宗琥家は近江の龍井の流れの者といへり 龍井
関の流れは関寺より二三丁西へ入て直 出る入道
付いれもるくて 在名掾ヲ見え候

東の常陸ハ千葉の庄東の庄三十三所の住主なり
宗祇の孫弟子ニて八月晦日八十歳
駿州ゆきつと云処ニて死
いのちさへゆめのつれなき老となり
あらし松の花の跡おもふと
宗祇の白雲斎 年 宗長ハ紹巴ニ丁所ニ有

笑隠て
此句ハ紹巴の句 世をあらしの花のやどりかな
より云よせたる風雅への宗匠なる学る誤し
無證ニ留めしと云ふ 是俳諧の虚実自在也

冬かれけて
外
夜ハ冬の季を重ねて無理ニ露んと云侭り ひとり唐笠
のなくとしてあるのうつりとも付て 場難と云
人あれども是は非也 一句ニ場のさし合をくるふ五俳也

志らくと
冬枯の芭の花みち色立して白き姿なり
地雪の冷しき体也

鳥賊は
外 前句のしらくと酔けし

五
旅人体とハ私也 此辞し 昔ハ俗とらるハ 語を残
したる所 烏賊ニ味なとありせんとさ

あほれさの

是ハ李紀平ハ杏子の書律も禅つくされぬ風情よと言付
しいづれ此あたり言語のあつかひ嘆ずべし

枯れ一升

是ハ酒割る菊を彭長の逆とみて此付あり
水とけいるとのめつらしきもの面白し 枯れ
と云る香の取ひ方感ずべし

日東の

杉落の月を詩人の寂ぶさま酒割よりのうつり也
日東の李白ハ石川丈山と云る詩あり
丈山ハ作名三河の人比叡山の麓一乗寺村に
隠れて詩仙堂築 寛文年中九十二歳

巾ゝ木槿

李白ヶ坊の月見る人と付ミ詩人の六韓の事

付きハ死なむ薔薇を思ひよせて作る也 其ハ佛の
死後の御とふ巾ゝ木槿はさみて風情あるのとり
もやし嵯峨ノ山墓花かざし哉と心得べし

牛のあと弔ふ

是ハ薔薇うちより木槿まんまに牛のあと
弔ひ付けたり 則御寺へ寄せし牛まらん
一説西院の今若牛を借りて寄り文の日借りありしに
其牛死にさきと言る返しに
銭をもうしと其よりまうけん
人すまかしれと家の命ハ
是より出る付ミとも云り

嵐の

大方の人情を魚商人の通ふさ方或ハ

房總浦 アミうせしと生けるもあり ものうきさ
遊船のさまさへ見ゆ て手の巾々ひろ [illegible] 体
の付こ
此絵好くせし 梅そて 西印し 絵の日の時方など写し
[illegible]
ひらし近衛殿下 [illegible] 此一品領主増えし入家無に
集の死せるを [illegible] し百姓をめして其処の弥や有
と河世之八比卿の昭娘追備る事 [illegible] 下
されける
[illegible] 柳の弥々は死するをうしとおもはれけるにや
其後 [illegible] 部して死する年みまよみ出りけりと
此絵にてあらはとめつらし [illegible]

[illegible]
皇いとおしくと云うけり 玄信もとの姿なるかも
ふかるいとおしい女の風俗と見て女といはれけるなと云
[illegible] の [illegible] 思すべし

口眉かくは眉を剃り [illegible] 也 画眉のみなり 非ず

け山 は妹の
眉むきい眉剃し 晩合田 妹身すれは眉を剃是を
眉剃と云

朱雲
此は京ノ妹嫁入し [illegible] 宮仕の体と嫁は [illegible] を
ほうせて [illegible] の [illegible] を [illegible] とする嫁は年も十四五まで
[illegible] 眉かきてわとし [illegible] かと [illegible]
[illegible] 迄まいすべて [illegible] 眉かきてわかせし 嫁は其
[illegible] の [illegible] 也 [illegible] 書の有す [illegible]
[illegible] 此二人の [illegible] 表して [illegible] と思ひます [illegible]

五評
その [illegible] 考へて [illegible] のあるすまよ
あす [illegible] 、[illegible] の松の [illegible] 姫は [illegible]
[illegible] のみといへる 是一主 [illegible] の [illegible] ころ [illegible]
皆 [illegible] といへい [illegible] の [illegible] のさまへ [illegible] 引 [illegible] て [illegible]
[illegible] の [illegible] を備るし
山 [illegible] ませけるすめの子 [illegible] を [illegible] 同 [illegible]

これハ引眉と云て常に云来れる眉をひきて出る
如く近き事に似ハ似たる縁ハ他に移れも付かハ
如も自己十体の自他の似せ句のあつかひ尤もまうける事もあるへし
全体に又他の気配する体を見てし

隣ひく
廊下ハ萩の

眉書るくと立くらし其人躰を見て此場に
後のうつれるさま 手はさも 去名ハ花ハ月とも
すきわたれる みをひやかなる体を尽へし
廊下此萩の露つらぬ長き夜のさまなり

長崎の名所
光大塔の名
の旧跡志賀
まて有へし

河上へ桃か此手まて衣を振めて
木の芽と花
木立前書のなく振衣千仭
折句
切字のこと 新式
歎息し
懐紙 無るハ
切字あつても無用なるもある
初心の独躰し

舞姫を

又錦繍帳裏　名月を常に空しくする　青近より寄って松は月

是は[illegible]

千[illegible]字と云り

趣向し

[illegible]蜻蛉の御意のと云へるを施し給ふより　御意と[illegible]

是よしの御意よく吟して味知へし

名和ある[illegible]る

[illegible]

発句塵世を[illegible]とくるさま[illegible]心を折りくても余情を添ると

たる[illegible]のめし[illegible]仕官の[illegible]の多い[illegible]と共に食

すると[illegible]を封し[illegible]

[illegible]

此[illegible]は[illegible]る[illegible]と云ふより[illegible]

付[illegible]の[illegible]なる

体を[illegible]

[illegible]

うつらうつらけれと

うけれんと帰りし[illegible]の車[illegible]

[illegible]

かく[illegible]たち[illegible]

[illegible]

ある[illegible]を[illegible]

[illegible]て日[illegible]なし

とく促さるゝ世の移りの風なる

鹿ヶ月

慶は近衛の男子の巡りきて うつろひゆく鶴鴨の高名と
なりし出でて来し
桃花を手折 貞信の宿
すめら月まなびと 足は常住不変と文を書き折し加ふ
之慶と云ひより幾般も盛びよせし鶴鴨をとき越子
風流花季の路を付けり 貞信は其の花本まで花咲き
とも又し給せり
春の幕下間るもの忍びくしけ
ふりつひうけぬ作法なるらん
寛永二年 年六十三
一 貞徳は 松永氏なりし……

西山宗因

貞徳の俳諧は盛の国ましうつりとりたりと評され
旅人又俳諧を近き須東武書する人井出の種をとる事て
知れなりつしるを見えし
西鶴のめはしと
俳諧の最も頭も国ましうつしと云ふ 談林の始起
りて都在当るの古御を見出し 任さすさに三箇法
師の古御の風見て竹士子て伝れしさまする足し
床みけて誤り述べ経旅なる男
誹諧の性位はおくを世と見て高き変化しなる仍て
老と付ける異なる愛らるれ事其の体と成る又
人都りて京の数多の誤る経済とに知れたる
好きたけ
高く国見て消れ 明し たれは 経旅するとふみより

其情をこめて作り出したる名所や祖翁の付
方死活の所用なる従来の睡は千古一流の死句と作
り出したる法なし
続様に　弱半北に向かる一さけなきまゝに
十里ある人の金処へ出かけり
是もよくてお定りしと云べき処打ちまぎれと見えし
様な近時の修行の付方なし
江としと
様を云ふ此病ある句を評病なるとはなく
言ふ事より三句一かるみ也といふ難有りさるを
越へてある男と他とさし即ち他の句を此病
は自ずから自他の差別あり
明日は賤
此病は一類として前者の付句と付て車中合点
の体なしと云ふべきせんといふべき為の事

又前の病ちまよへる付則ち句を立てつる軍陣
林と見る句の作者の意おもふ
小三吾
其の道も出たる覚悟すり則ち実朝の御事と付
たり哀傷し事請有り小三吾と云ふ名は正宗
小性の冠者の力つき名をして一つうけしと為那る
一句の寂思を付へし是皆自他変化の体なし
月は手ぢかれ牡丹盗人
小三吾は酒屋せんなる酒のみの味出しては迷名
我は牡丹盗人なりと名乗る事は句の盗人と一平の
兼題の盗人の取見是と思ふは作者の風体なし
縄網のかゝりは掛れ組みて
我は出牡丹の情なし牡丹の盗まるゝを待ちかね

風情をもしすらい似らぬ 無量寿の付方也

さくらの寺 隠れ切り

右ハ章猶ある石動の仏ちまを地蔵助哉
寄ありしみありとつしとつ仏みのり感心也

一 卯花の世とてや婿のいかめしく

是ハ前章深しさてを引きる変化の付も常格の付方
之鉢を引回す婿の花詰露るはて注目すさまさ趣
花の世ハ旬のとうもし 季の用 尤感心

秀 いくらの春を可賞き

茶ハ婿と云ふに比ぶり附と婿からめしくといふ付
より気いらく無世間ありきもへん 人ハ婿を名
の体ていやあしき古きまハ人の事情章其
根難哀仰し

すくいきてたてはあやめとすを覚ゆ

七夜 春あなつまる 老か衰れ

柳筍の餅

先と云ふ 仮の園と付らく 此季の相ひ其
西印 月く因云ふによ鶯ヶ付きり 肝要と寸る所
元日二日の頃寸して初のうと言ふ静めさるとも云つい

賞をおせよ

是ハ園にお祠の堂と藤に 堂の南門ハ扉の外に火を
とりて意祝をとりまいさせ 堂る日は寺にこもりや
又日参婿ともハ仏之なく 堂を念廻にまつなすや

篠深く柳ハ柳の

是又季物りにて前句を窓ハ日にて名季を附て柳
の落ちたる跡の葉のみ催も散るもの淋しきさるべし

三 いすれかつきひ不祥の実 人

篠深く荒らさよりふ祥の奔といひ寄せよ 其落
言ふる 実てる三味かくむといひ 風雅の情 柳を縁也

道すがら逸興に打つ暮を云
此句は心私有ずして我心をあさる人を所とし
三情観見て句作の開手の興をし又興にて其發
せと此人をよく云はれるは能人と付けり
　ゆさめしの
前は志を離れ老人と付けて梅もの字よく
居へたり　其心は人見まはすと手をいふん
古翁　云もしもいたく老さらぬ
　老の日めん
七十とあまりより性悦の心と見せして仏堂の有所には
うりんの但子春様寄進もありて浄世も近付
けるも御座を柳は離とあるけ其常に此浄世を
もはやかくると見離さ浄舞は信都の月見も常の

此節ぬけ
月は常住
不変の
ものとし
又菊のさし
人をを
くらず

真理あり凡民ともつきまる所は皆仏なし
　一　此傘の下
是は傘うち着ひたる人のおもむきを遊て指多あ
るりもし
　蓮池に鷺の子遊ぶ多見吾
是は句文意の姿と見て付けり　言色の付し
　窓に手つかふ藤桜をすゝり
水近き花作り　細鹿さまの付し
　月に頼る鶯の声かなし
此句は前句にまつかれすくとある句すし外にて見
の人よりあはれ東き身も異邦に放られて自分も書写
あるの細すく体と見て此句に物凄き浪漫の人其の月子
立てるのえさるゝ是を哉すく人と見るは悪し

別人と見られ候ものの付ると申さすま成也

忘れぬ様臨済をまつ

母帰とくるより中秋の人あまたせし臨済の母の老女
此付より

宋虚庵栄西僧伽梨付嘱書曰

昔釈迦老子将ニ円寂以正法眼蔵涅槃妙心ヲ付ニ嘱ス
摩訶迦葉二十八伝而至達磨ニ六伝而至ニ曹渓又
六伝而至ニ臨済八伝而至ニ黄竜ニ又八伝而至ニ明庵ニ今以
付汝

一説ニ臨済は禅家の倉也ニ大きを云フ此説あまたに臨め
付よりの見し

待師の母ニあり守都さん

此ら臨済を待と云より禅機をおとし悟道の時に
聞のおこり[illegible]
一休の事

是別無事の事也　其事[illegible]即悟道
[illegible]

禅語曰大海ニ降着霜手巻ヲ空蝉声ヲ聞手
即刹那生滅ヲ生而即滅シ々而即生生滅
三世始終悟ニなりて[illegible]生死又如斯
口伝ニ述べし

[illegible]

[illegible]

ひとりハ典侍局カ内侍す
山桜の花はなかく体はなとつまハ雉雲れすしてハ
さすかれんと明石人まとのさまみえて上﨟女
房の体体なり一平家没落するさまあらし哀深

次丁ウ
花ハ天覧一双の
セアル件ハ
花林抄ヲミヘテ
ミマテ

三日の花鶏諸尾長の合戦
富まさん古法のとりあはせいとおもしろし合せ具毛
まてとかへしなるへし
伊勢[illegible]堂云　鶏尾狸野合セし
或人曰三ケの花ハ三月節会ニもあれ三尺はこれハ不は是ハ
梅桜柱といふ三本の一瓶なる也或は前々へ三尺を揚
花に枝あるとか合戦ハ百千鳥の長尾を立るへし
次ハ三本を神前の捧ものとし見飾て数帰まよく神事
の様なるへし
古師聞日　都の事ハ更にさ　野諸尾長の葉松る

やう云花見ハ三ケの外ハ禁しを神事作之二月三日
すいあしん三尺の法を起するへし
大江朝臣云日本国局ハ内侍か殊多女官の並居体
ゐれハ桑狸の野合思ひなるへし
紀事曰　禁裡清冷殿南階前有闘鶏其野諸家
中雲客被出之仙納弥市　観其事決勝負
志らさきひ越のことなり　為今
然日本にハ国々の産物貢し体に付より越のことを
初ハ貢越の饗語なる之し是若向中へ祝言ありて
歴代と付られ　志らさひ是白鶴見為貢奉
一体之
一説名有より越路へ出る道の出迎する社二社一社ハ白
鷺明神一社ハ稲荷野明神とあり　花之白鷺明神

地主ハしん 元来二社中照ぶやくもすれい神事ありて
田畠あれすさむ常の白髪の神 粗陀を好む内の如く
並と結すれい如くし風の順 けしと式例三月廿日也
閑夜日 三ケれ内まく都ハ早く花咲かく旅へゆと越
ハ春と消白雲となりしをいさむと三ケ時の真するを三越
の後なるれの對なる三月吉の紛会越のうと共
いかてか行体だ
暁当 三月三日越より帰依を残するすす いさむとふ
うとを指来し白髪の老人今気を損して勇ある事也
蕪村 標良 古朗 金令 風羊 皆同意

梅を當くるす徳こす十歩

てみ華に日と房す 蕪村

外ぶ端るい戸り降つ定なきの訣よを思ひよせれり前書す
ちかう有大切のすと心あるべきすすみ 逸人か散る何の心楽よ

けしの花とくるま刹俗と伝ふの常係あり おと思ふ
すゞしの意ハ僅か十歩の間にも志くしと見れハ忽月すなる
有為轉變の世観念しそうし

こうもみわ水の泡あり

泡の面ハまた乾坤す文喜の空より出るし出月が
らのくろる色を帰ありて比論して我者の命を
ひいけなき勝と振まあり常轉變の姿と涅槃経
同是身無常念々不住猶如電光
足らを遊む身を作るすとし 所謂刹那生滅ハ
ハ僅す一歩の内よりも死あり况や十歩をや 誰か
身体踏むかし
一掬無限の氷月の猶志ありと對して求むれ
意の体をあけけれ

嵐の体の枝を 細野人の名ハ貧くて

此所三ハ若者の姿を一写して若人の体をうけたり
無思をさし世にて[illegible]謡[illegible]日を上不用のもの也
して[illegible]ながら俳諧[illegible]
一 [illegible]隼人正[illegible]にさして[illegible]
[illegible]を[illegible]も[illegible]重き[illegible]
其の[illegible]の[illegible]
其の[illegible]と[illegible]所[illegible]
[illegible]人隼人正を[illegible]
一 [illegible]毎[illegible]の[illegible]
[illegible]のを[illegible]へ[illegible]帰る[illegible]と[illegible]め[illegible]
さると云て[illegible]大内に入るも也
[illegible]者[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]也と[illegible]の[illegible]
[illegible]と[illegible]ある[illegible]の[illegible]也

山うば
[illegible]の[illegible]と[illegible]体と
[illegible]を[illegible]
[illegible]みし[illegible]よみて[illegible]
[illegible]とて[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]と云[illegible]
[illegible]上[illegible]めくやさしき[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]上[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]の
[illegible]の[illegible]
一 [illegible]
[illegible]二ツ子[illegible]
[illegible]古代の[illegible]のままを[illegible]男女の[illegible]
[illegible]仕立て[illegible]を模様に書て[illegible]なし

風俗を悪し 僅乙女塚の[illegible]男[illegible]男子との事
なる思ふ風情まで甚奇也

二河白[illegible]の外力ちからを擬されず
然ら情[illegible]と較より甚[illegible]ちさき[illegible]擬[illegible]ず[illegible]
秋比に[illegible]あまれ[illegible]気の一[illegible]称[illegible]一[illegible]べし
[illegible]唯燈籠のやさしき[illegible]の娘へ秋[illegible]して[illegible]也是は
[illegible]作りて[illegible]と[illegible]ものと[illegible]と
[illegible]風[illegible]折[illegible]して[illegible]めぐらむ

[illegible]まし[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]して[illegible]よりまれ青
[illegible]のありさま[illegible]しまの[illegible]情を[illegible]
せさし
[illegible]双六[illegible]の[illegible]

是は[illegible]双六[illegible] [illegible]風[illegible]人[illegible]をさまくあ
[illegible]を双六[illegible]と思ひよせ[illegible]

[illegible]実みる[illegible]子[illegible]聞く
法[illegible]実[illegible]唯[illegible]と見るなむ
つらし双六[illegible]の[illegible]と作意して[illegible]
[illegible]あるを思ひよせて[illegible]実みると作[illegible]
[illegible]の作方也

思[illegible]のわきと[illegible]を作[illegible]

外[illegible]実と[illegible]より[illegible]用を見せさ[illegible]の[illegible]
[illegible]人と[illegible]の[illegible]
情[illegible]作[illegible]あやしき[illegible]の[illegible]人
の[illegible]さまを[illegible]して[illegible]
[illegible]のうつり[illegible]也
[illegible]餘[illegible]つりし[illegible]人の[illegible]也[illegible]実[illegible]と

最上山形の山寺にて山子杦の帰田雲豹よ浪人俺
しきり思ふと付られ雑作の句とハ一句のかさらとつふゝ
今ト婦の君より出るらんとや
前句の浪人と見て舎婦のみつくさすき出る前の雑
と春来まきる御所之職体なれハこ其前へ心の御供之
近来浮世青表紙手弁の舎婦王舎婦の郷之 宇多院の御
舎婦舎何の包子物先娘をお嫁の舎婦なる
羅の浮坂の水に流れけり
宴ハ表を悪と云より一部漕取て其甚の佛を拝なり
佛くるゝ魚 作られけり
関東日證寺去後佛去田の作平息空上人の勧進一心念仏
のりまとるり鉢の鳴る哀れの作の阿弥陀仏と唱ふ事有
めつらしき説有同様の東路くり
鉢の音兄御中と作られし

日向かの定ひとつて表去衛門の次く花見せし者有依て花
見渡り上野より出る色のめつらしき事に附て陸中さ付ハ急ぎのごくと
云より壊舎御坊か高し体
立形 山寺みれの島 立夜
立形ハ名藤花紫草花見渡中の出家の体を云んとも萱咲
曲田計も六夜とよ入り舎仕建に准して見るべし
姫しけよ 躑躅 予在ちりしと
留厚の十さの付し
立雲の雲の何めし可随し
雲柱まさへ見る暖気への日没明けし
同時や鳥綱の鞭の長きかな
馬の眠りぬ鞭のありさまを鳥網の鞭の星ハ果迹事の
薬店の此作「矢奉」之是より新の名を呼び平るに附留メ
経長共に二首を二句はするなりし

庄内の松をよみて遣けり
象潟の古庄内の松と名高し
此所は古人の去年なしと云事を云はさまとえて来る
庵の松を賦して清き風筆し
拾子　あそれをけ子のひつん
是は遊快して古今の名ある諸国の松を論せしは従加賀より
席をさくしつらし其の上を見し斗りて拾子の
哥くろらし聊心奇にけしてこれを哀傷し
嗚乎力を尽く刀ともし
貧窮せずして千代の刀を受る今方の哀す拾
し子の今は漂泊す世は悔ともなる人情の情し
兎の異芸の風のなきめつしまし
是は東坡などの体をまなぶ前に流れ林趣向をきめて
西中の賓客をもてなすは翻案の刀をうる信友の

文七詩は黄金多多文不服
惠崇詩　笠重呉天雪　鞋軽楚地花
謀する庵ら行袖をとし
是の異は抱すきしたる籬除すの風俗するより言
雅ら行袖を謀巻はたる体と唯な風俗の芸体
とけんとて也
他人と撰と指はのみけまん
前なる旅は漂しなる体はず香究はせんとして放蕩
の体となれる格を柱とする作せる実に曲節自在なる
芥子のひとくは名をとはする禅
是は一家し尤く前の三分の観点を離すなり方に放蕩
淫楽なる人のためまたんとして安心取性の悟道を観す
事也
一休禅師来れ集道することとき蛇青に入す香子一輪撰て

本事西国巡礼の土姿一日見るより恋となりけり

又　法の花もてあいさくらけふもめして
いつくしみこそ四方に満ちぬれ

芳野する時して諸行無常の陰となし
三日月の影いくらく降りまする

脇ミカツキ　を詩に出

我云　妙法かれん再見かくすもの
芳の縁と三昧とばかりして長暑風をはらひ掬露扨湖
水は定部の風合こうれい清風徐来水波不興
飄々乎如遺世之独立の遊をも思ふべし
西方三りの京を都部を忍びて源水を見渡しけく
風情こ夢　のへすまゐいつく秋なりゆくすこし又錦く
事をのへすとも　言葉するよし
まの事をゆして　弾せ気を放ちける

無得無念の哀なる姿すりもまく命をすけれみをしむ
上品の風情を付たり其仁愛の先意ゆかし
あるよき念仏を隔つる
あるまじ欲の悪業をも　何となく念仏のおすゝみ
なるハ煩悩　さめあへきも有難かるし
三句　行き行く煩ひつれ　起居して
夜も寝の手も悟りつく　念仏煩ひする念佛の
数こしまゆかう宗都の付し
思ひ兼つる　帯の帯けり
夜はいかに煙のりしと云ふを初めて悪と休むなり
おそ傳てとよくるより思ひ兼つと続けたるし
山より光説花のかけるへ

総て家ハ意を絡(?)とすれ 言句をあらはし 心を新しく何事(?)も
句ハ意を先へぬ 姿と云ふより 詞ハ花の如くなるべくなりぬらん
と心得やりたるは 俳諧の 詞のあるものは
思ひ寄り出まし 只へハ己れをまひせずよ
よりも
一句の意味深く作り意せしむべし
其詮(?)の目を越まつく
此句中西(?)古人の緒世を出て二句一意と化して れくとり
如り
而して此は花の如くて其花ん
そのまきしきの ウ月の比
句意ハ花すみれと鮮やかし 詞は細やかなるべし
と見て物を見ハ其雪月の花を取すべし きとて風
雅の心をいふべし

あらはれ
岩壷(?)
一句立 戯作人あし献 けく書いましけれと
おのつまあこて席めつてるとき
此家よりの家文と是ハおのつ妻いさえてまうかめさす
かい床のつかまへしと云へるをしぜん翁の一句の
家を為すまし せまし
祐するそハ無骨気の俳山の すと覚えて意の心とかなし
拾てハ俳諧の趣のしみたし
升云曰 此方ハ世の妻ハ安くハまする席めつかうる 肝の漬れる女
てあるにと云ふすこしまし と岩壷の女房と云て何の注
有りや 嫌しそもまて晩 かいぬこと 一句の為まして
風俗あらむと云へし
丹後(?)此絶なるや しられ兵衛亭の稽と思ふり 此
と云ふまま いなる事 岩壷人の妻也(?)

岩壷人書

思ひとゞまるは無文体のやからとなす也故に難陸体の詩
とも書として去んが其あへ思ひかうふり来めるし
あらむとつやしますます意の心深くなるを俳諧のおか
しみと云ふなるべし

人の机ひと論

然るに識人是しを眼の利すなきと判しけるや其るの
岩ありも袁ハなと思ひかりめ かゝみ研中には他の実を言
さ葉を出せ其書は唯其書にて実をかと野るの深き景
ゐなほと云ふ也と定て思ひかゝめと言ふ字揺ひと言對
をるか作也

然るに是は先るゝ葉あへて思ひかゝめと立るかゝみ研
ハかうすあの此あるませれひとの机ひ論する論を研ずよ
と心はうしはら封し

花の慶馬貴の

然古此他之を其あを重しはり当字をひ其次と声を學をて
まことに其と帰るひと句を道し一つ尚の意と曲節
を深けるその位よく使り言りとなし
然三文字の其の他門に付俳文のからなれ甚俳は山
枝明にして字一念のまを用れは省かと言ふ
文字句の此ますなりの古俳文の言ふな外
他の家を稿なりや其川はは文字ねをなりあるなり
返すと一個と意を省ることなき心のよきやとも云

恐れ 其に此のまなくのは帰るあり今は実なるべし

雜在と其の月 のするし

是非 梅りをゝ花を梅を古事のこと為すし林の清
此俳を残のめ其を好の帰る処唱る元 知る其の名
在るの一つ

風の在る秋の日

閑寂なる隠逸の体は酒をすきと云ふ句作り自ら[illegible]は
さびし時言分し兄[illegible]しなる[illegible]も秋情を添ふ
の句作なし
晋ノ淵明九月九日無以酒坐宅辺菊叢中
王弘と云ふ人酒を送りしなり
芭蕉 菊[illegible]る 笠
[illegible]と云ふより[illegible]以意をうらする作意[illegible]
[illegible]と一作せし[illegible]し[illegible]に当[illegible]楽しなる句[illegible]
当季より[illegible]一句[illegible]文章[illegible]し[illegible]は兄[illegible]
[illegible]此句[illegible]を付ることを師[illegible]
句の[illegible]といふ事[illegible]に[illegible]小[illegible]と云ふ[illegible]
[illegible]降と[illegible]を付[illegible]文章のことと云ふ[illegible]
[illegible]
論語 子曰言以達志文以達言 不言誰知其志
言則無文 行不遠
加茂川や胡[illegible]代[illegible]やと近く

[illegible]室を訪ひて侍りしに[illegible]朝[illegible]代[illegible]
しけれは西の方に外[illegible]の書社を離れ千代[illegible]有中[illegible]
其氏子年々常に冬明りを[illegible]借と[illegible]の月[illegible]を種
を得て送るとも
宿舎の鏡子つかし[illegible]
閑居云 宗[illegible]心を起[illegible]中[illegible]も[illegible]
是此の情を[illegible]の人るや云くしく[illegible]も[illegible]と
待ちまほしさ
且老いはまた[illegible]とも[illegible]とはまして[illegible]の[illegible]
此の事を備ふ一句の声さまを窺ふべし
思はず[illegible]見[illegible]けれて
布つく[illegible]八大根を[illegible]よく今日の人情はわかりて人待す
るときれは他より是を見て[illegible]ひ[illegible]世の習ひ
うき[illegible]とさや 三草

然とするすし悪女の如也と伴ひ紀其人を定て
おもしろみあり人の訊する耳さはりするも哀なる姿あ
岩翁は自思ふ自三年ハ他と三年二満ハて後ものさとと
捨られもせす人わすれ也放れ子
おん悩つきも取立伸合としてはなよく放れさつき
作り殊の外も捨られ一羽あるを見て紀部なるし哉
ハ猪皆けしる風情もし

関云
犬阿ある巨燵 おち人を見む
巨燵ま新れ子とありしさまの悪也さまをうつして
おもしろきものと寄るし体とそハ死別と称さる

門守の翁は残花かりを殊了

ハ云
三人ましまして姪女の名を学れ門ちま情をくく
石乃ゆ仰もなりん

血刀かくしけり門の暗さよ

関云
門ちられたり殊さと立ちよりなる人の性恨の場也ける
あるまあて悪体とけなり

是アりて母の終七いける

関云
是まあまにありと見て殊に近き七い日とけたり是は其後の
伽の母の若さも思ひやるべし

冬傍納豆たくる音すし

一画天堂
七部集廿ケ
俳諧伝聞二
書の事也
以下
なまけ書

外
今朝の雨もして明方の気色の様と作りて納豆ハ待の一生は働きたる古人の句作と味へし
夫と冬と思ひ 殊豆

関
明近きより見守て奴の事たるき納豆汁つくるの音也

玉一依らん

花の法 桜に懲と捨るもし

関
納豆よりも桜の散るなると思はへて 過去の花と虹は
しらずはなしむ式部織の佛事法事懲ハよ(?)

米 志かし好よし花さこゝろも自らよかすと捨て捨し
此句其むかし茶師かし 先梅の徳とやすかくめ
讃會曰 徽之類 點切徽也 ウルム アヲ白ヒ カセとあり
説文中物久雨而青黒也 志かれハ此徽ハ衣紋のかびせ
梅見とて是を縁せんとするゝ次の其名のことく云よりり
此一会せし心ハ月の花の跳する心ハ是則五徽意の
境をまぬかれさる業績なくしと借て其句あ唐歓
をすて、無為の道にすゝんと心をやすらん
米 待ものいはさ數寄とのもし
梅の徽をすてたる思愛の捨て玉若またる人をさらし
とみて待ものいはさものいはすハ志づかに行すと山吹ハ
口開しの縁語ならや
関 花の観想より無言禅師すとよ見出したるむ文畫に栗
山吹やさも無禅師の捨衣

天堂曰 オケ條

衣の瑞鹿色ハ山梔子とこれにハ或也此山吹ハ茶の
ことこゝ以情趣を云しつこの事とする句なり皆茶ゆう事
五 老の而句此禅
其門ハ心の俳諧ニして文字を撰くするに非す 数奇
且て句意ハあうすて存とつる字を迷てさゐく
其説あり 爾るに是を禁る 開きて 花輪道と云
かて存とあるをまれハ是も茶の事をせとつかハ甚以
隠説そまるを春季をもつてさせ祖翁の深意を志らぬ
されハ此句知るへし
爾義ありさとふぬ人の事をとけれ
是ゆる其語の事の事かとさまよ
かゝる意を擇り知れハ知れさし
此るん人を待柄是たくあるしとゝするより忽るの事の
うつりめ蜜(?)をさしてて花の泣煙惻桜を捨てたる
とも紀(?)あるのを捨てるとゝるる 信
明し祖翁此法まあり 絶ちた一てけはや

此時某世中を捨と若年より世を遁れ　芭蕉ハ道善
なく之斗にて無常心得ず
ぶし花は信くハ自性道者人の又もや太極の聖
は参禅しなまと見て次の偈ハ化し
偈すゑりもんハ拈花微笑して歎息と其体は
作せり　聞の骨折甚深にして妙さ
人も能すとの差会は妙なる也能し

以下某部俳作と同意の文也

西人信州さすらひ身ちに悟道の腰をあらし現のとき
ゆゑ不易ハつぶれ来りしと云へハ書けりと斗差へて
甚深ハ極るをとへるも差出すとされ
此偈も無言にして疑念のむと仏性し收ハ口有
其とりの向無言は語播也と是あはつ作る傍記
聞すらしん

白芥子偏にあはれ羽もぐ蝶

聞　白芥子ハいかゞ浄山清浄の地に栖むれハ家の氏をも
はぢて浄山といふ名ひ号するなり
本草曰人見白芥子生貴女故白芥子名天女
　宜旨かくしく　釵を賜る
是ハ清浄のれを云すれ　是ヨリ　昔は釵を好みて
ハ除けしかぐねハ釵をせり
　ハナとせを三つ尽る童母ありて　賤れ
又ハ陽をとるかも寿の因由なし　親を撫育するを
葛しれし式る八十年と三つ尽るは七十三の男すてたりや
八十を三ツ尽さると云る俚言也
　なすもなく云もりし七ツの壽あ
式付色々の説ありてものかしきハ除入し七十三の男の母
しなして、めでたく、めでたく　浄土往生也　さて七夕
めでたく賀るかたへ　此旬と七夕と知りしろく作せしもし

闌　西南にかつらの花のつぼむとき

是七月のはじめにして此月の節は西南の星のあらはれいでゝ

かつらの花は八月のみならず花を喩けり十五夜は真盛

また七夕頃りつぼみも蕾となる一ケ月

朱　ある秋香も出まかせ桂の花をとりて月をもあらはせる西南に

・つぼむといふは七日の月をいへるなり

蘭の油ぬくまつりかな

朱　蘭油蘭膏とてよろしき陳蔵器曰蘭草生沢畔

婦人和油沐頭故名蘭沢是婦女のこと

闌　即此蘭の葉の油にて蘭油とて油をとるなるべき

晴る夜の嬉ぶる女見て帰る

闌　蘭油さすといへるより賤女とみる見立なるべし撰集抄の

伊勢の中山しけいけし銭をわたすなる東家抄の事なる

銭なの絵を借り作りしの翁しの遊女ゆるすけしをし

の見え侍るなるし

朱　秋風辞　蘭有秀兮菊有芳　懐佳人兮不能

忘笑かへるさまよりも女を待せて帰る女と作りなるらん

路銀の一筆を添かけのあり

家にはなし家の用を弁じ掃きてある路銀などの作れ

らん賤女のくせ也と

ちぎり来て様子かたる正月は

朱　出る路銀を空よとしるるものつかしさ事正月

といひよせたり様子かたりて風情あり

先師曰　此哥のわたり地のもやしくを見ても妙術也

掲蘭油は其香幽なる付蘭奥を油とみる賤家の賤女

はおのづからよく身をすり路銀は其人の身に応じて粟と米

也未だ七名あり論語に冉子為母請粟與之釜米と

とて何か祝箋めかしく[illegible]してこそ[illegible]とは付たる

し　両句の差別あり

つゝみ[illegible]　年季[illegible]の[illegible]

天仙注

[illegible]

春[illegible]正月[illegible]より其[illegible]と陸奥の果[illegible]

年季の[illegible]楽[illegible]の[illegible]作[illegible]し又[illegible]を[illegible]

[illegible]仏[illegible]上[illegible]信[illegible]色[illegible]

曉山曰　年季[illegible]三條[illegible]有[illegible]

西[illegible]色[illegible]　鼓[illegible]

　　寅　日の旦を[illegible]の[illegible]起[illegible]

年季の[illegible]より[illegible]て[illegible]の[illegible]仙を[illegible]種[illegible]の

日[illegible]

　　雨し[illegible]　地

閑　[illegible]の[illegible]所[illegible]雲[illegible]皇

居の[illegible]の[illegible]

住天仙

西　[illegible]

冬の日の[illegible]

　　ノかゝし[illegible]人の像

休　[illegible]法[illegible]の[illegible]仏[illegible]古[illegible]

[illegible]の[illegible]や[illegible]仏[illegible]

も[illegible]人の像と[illegible]

閑　[illegible]の[illegible]て[illegible]田[illegible]して有[illegible]の

[illegible]の像[illegible]の[illegible]

照　[illegible]

[illegible]

　　[illegible]心の[illegible]の[illegible]

[illegible]の田[illegible]の[illegible]其[illegible]の[illegible]

り[illegible]の[illegible]

西　[illegible]像の[illegible]八[illegible]

其等の中に於の千〻深中にも深き情を根のある
が宗匠たらし

隣すして咲花の思ひ

閑
情を花と見るを七種と見まて花を引あけ
咲を得ふ自称ならん

孟
其も〻の花と見ば七草と皆古人の下にありる有
ましく花の情を風情より咲の余を見出て
花を思ふん一句の作意遊去る作りさまを感せし

杉板の下の陰ふも風

杉思ふと云ふを隣や出云の風情ありて妙
御すさうら美き大時のありさは限なき
地の月高く〻柳かりし
出陣の思ひ出を云ふ体を美貞が句当の法傳の別
美仲が松夜の姫君より別ると此句のさまなるらんか

物かめ枝をとめる村雨
ひとり寝の夢さめしは菩しむ我が枝を〜の音を
を思しく心その世捨のさまやとおかこそ読み候
気候

田家桃花

春月や 竹の垣ほに 並ふ比

右云 冬枯のさま能言ひ得たり 春の字よく居り
又芸まきる冬田かな 雲はまるものなく 竹の垣を
風情見所いふばかりなし
閑寛 古今書子如く唯田舎の様をして月の
姿に春読し 田舎の竹の垣ものなく並居る
様を面白く言尽し候

升云、左傳ハ趙衰冬日之日言ハ可愛し

画者前書子細あり此時森山跡すれは
略して冬のうと意味深しまた板団扇眺
定ともし之にも子細あらんかく前書あらん
べし

冬の鶴は実さこもり

閑
画此所傍らに金性鶴の翅を添
画をやまかめて架亀鶴に此所を冬とせ
いつもと定まるは

升云
意味云へからん不可説とも解をいふ　て二
全体寒て冬を定めたるは代々りし
義をなし作せぬハ二義の意を可説とせる
墨者此所解せうかまと言語あるをかへからん趣なし
言論之
概括して山家の体を本朝の俳

云地尾的傳に五ッ子十二名トト云
ゆかりト称して通ふトアリ

升云　終赤壁賦、紛ま霧露既ニ降テ木葉盡脱シ人影有
地仰テ見ニ明月
是者の言は枯の寂しとあるべし
萬ハ俳する菊みて居むるを照ざるりと
云傍ら風なき露とありと本にまた当たるも
の之当を待る上知らぬ勝様まて乃の中すも
かうの傍らもや麓の紅葉ちらし其外をも
に伴ふ夕見し降てと下へ通ふ所あり又の字
ちも待とつまるもの

乙叢の草叢の隆まとりて

閑去　山家の体後の月肉りて風ともずり
定めまさ
画者つゞはあからひは落あつてあかのとおる頻く
つゝす稀な出む出でと答ふ
是ハつゝくるまと

意なきは具足の月の恵みして
[illegible]を帝釈[illegible]いたくして
[illegible]八[illegible]陣[illegible]さまと見たる
是[illegible]方の[illegible]法も[illegible]と
[illegible]する法なれぬなり
酌とるとは蘭切をもつて
[illegible]酌とる壺の蘭切出する[illegible]
閑窓文 [illegible]の[illegible]を定め大
[illegible]の壺作の[illegible]
句[illegible]
[illegible]の[illegible]連歌[illegible]
[illegible]して[illegible]を定むるや
[illegible]の[illegible]連歌と

又此[illegible]壺の蘭切[illegible]より[illegible]
[illegible]
是等の[illegible]べし
[illegible]みやまず
[illegible]の[illegible]連歌と[illegible]
[illegible]一流[illegible]連歌有今ト
[illegible]
[illegible]も[illegible]連歌出り
[illegible]誰[illegible]していいもぬが
[illegible]なり

寂として椿の花の落ちにけり
寺前の静かなる仏経磬幽に響く
梵字の他ならみるめし
茶子余趣を求め得るの香
評 茶色の余るを学ぶと云う句で余趣と云
ひかけたる也 椿は如何竿の余情ならむ
綿子道る句遊しの女出丁
女子の象の事故に其女も何と云
読むは趣旨の係に附余趣なる情気の見の道ん
則春趣のさせ
庭子書作る思の落花

法依式は芭蕉の句よりは本質の風雅を樽し
れる庭山家之し離れたる所を見える様さま
足すへし書画の心を絵しうるる所也の事なれ
と仮の藻あまたの人は一句も之を篇る所に在る
本旨を何ぞも山の様子は其の情恵の落花とせ
経る事なく千古の見も猶る事なかるへし
評 深き山桜を摘みん
本旨とは之なる夜深きと云う附けして山橋
の子視せんと云は何の句に山桜の時分に桜
うるまと風景
しけます
同 麻刈として歌の余韻也
評 麻苅と云書山家の相は山桜の桜見んと
云ふ風情より麻苅と云る余韻をとらん

煙霞の人なるを

釈云　山林幽谷に身を隠せし隠者の山棲と云ふ
様の句ひたる人を慕ふに非ずして彼の人をさとす歌の
集まれと作られしならん

爰に今人雅翁の句を解する者は詩文に通じて
演出するも翁の心を表に示ふるといふべし然るを
ただ俳諧は上手な空といふものに実を居て虚を
述ぶるを虚実自在とは云ふ然るに虚と実とを分つ名の
書を著せる俳諧法にして是俳の国を
覚ましむるの亀鑑なり

江上に近く　独尊庵と世を捨て

文章　庵号を名の如くに住み給へる
其の事や独尊と人に意せば其の住居を独尊庵といふ
庵主のみにて俳諧と人のなすままを教ふるは
すまじき事なる事もあり

我月出よ我は朧なる

閑叟　聖賢の人と見て禅法なる所字観子曰
云ふ得ては心月輪を照さんとそすまたる

釈云　青月　所謂真如法性月而身は朧なりといへ
所具煩悩業障黒なるべし　五蘊六欲の迷雲也
なれば身も
朧となるなり

旅寝の笛に落花を拂ふ

前云　心月輪の見んとして法性の心を忽忘て一度
作者の風雅を旅をして笛と旅をさんと居るより
吟身せるの前の月に結ぶ風情ありて優しき

釈云ハ花下近の人ありといふ笛
閑叟は其近の人の笛の長嘯を吹より逢ふ　など自讃
すると云ふは、昔俳人にて一段すれとす

かゝる所奥ゆきて木仏の山居
閑寂なる境に入りて形儀すぐる奥の
中に住居するんと字国の武士の住まゐし留まりぬ
理なり其見るにて人と言ふ体なるし旅路
を然留とするもその面白き山居の体とやり
掛け山の嶮しさんと寂寞も自由なる面白き山之
木仏の山なる住居に余りあるとて人係
とぞ見ゆる

骨とりてさらにぞ寒く見る骸かな
とかくて一元出れぬなりとさん　須
あはれなり古骨の根より
一筋の生きる骨なり百千友となりて風寒くなりしも
あく情をいふ

此句諸説さまざまの説あり されども みな俳人の鑑
説也木仏の山間の骨をみて済するを刑罪の場と
いひ閑寂は捨し地と見え旅人の之を諫めしを
出して済を見るまゝと云 此云は家の奇遇を表示
の人とみえて昔より此所に庵する人骨白骨となりて
屍を荒礎の腕すると漢の賈誼すでに古すと引て
解せり されば俳人の見てあはれぬ説也 或ハ流人成罪
罪場化地なとい風なみと云ひすてゝすてなりべし
碧翁のわらべるこそ成も住さま骨を付しけれ
此句あさ嫌ふ子句もの骨見え寒く悔笑すさまじ
木仏の山居を深山幽谷の景を歌見させて
然得の句と見奇して旅愁の旅衣ハ大患へしるべし
死体の景をなんするしめ
此云ハ他の句とにて 捨下なと梅とする者ちれ
手義の趣旨所と以て 藁黒所と跡をなし 旅路の

嗟方に衣たまへ人が物に饑を絶す其哀なりさます
いふかしんば恵みうちやてりとこふあるのひがごと
足し給ふ最忠國師などの傳ふあらずや蛤
蜆とふまで時に降來つの志が如くとしてや全體に
泥の上に尾を引し鯉を捨得て
漢李陵母の孝養として鯉魚を得たる　もあり
忠ひ付たる作意の漢の武帝李陵が隠へ御幸
ありしとぞ

外云曰　此句は莊子の故事を以て本歌で付たるならん
莊子曰吾聞楚有神龜死已三千歳矣王巾笥而藏之廟堂之上
此龜也寧其死爲留骨而貴乎寧其生而曳尾
塗中乎と云ふは泥にかくし龜と云はんを鯉とすなる
乏鯉諍すべし
愚謂　捕ふらへもらし是は義を貴ぶと云ふなる其
用をはてぬやうしく泥の上るひたしまる鯉を

捨る事新しみを附すと前との句のみを見処と
さへとらふして變化の附なきなり
御幸のまたむかの御藻
鯉を捨たるいへる甚なす御幸の体を附たり
白魚船中ふあるとの附なり
さとき思ふ人参の小豆の花なるし

大田水の御藻とはあすか旱魃として附る夏
日長而民愁以てなり
愚亦水の御藻とするより旱魃とするも少意なる
解せ唯御幸の光景供奉のものたちの事共を
も附けたるべし

芭蕉ゆるむや　炭俵つく日

思ひつきひまさげの花ある所をとのへ田家の句
誹諧として市中の隠居体にて世の姿は貴賤も
みえ侍らん

無季なる発句も思ひよせて秋風の思ひよせて作者の働き

来るは尼の女性の客と有て
闌更曰 東の坊主あるまじ京中にかしこまるとけ
尼と云 坊主は唯の人とは茶の席にまいる也
きまりし

折し薄の穂 垣の茶寺 客人
かゝる所は舎人の乃木を源なす 程よく男子の
のりめし 御言語は有べし
都さん 飯台のごく風流

外曰 幸より花は竹の蕾に 芭蕉のさま
夜寒とみる面白し 寂寞の体よく言叶へし
香の壺 瓶風雅也

第六一

都なるより月前余寒の体を付なり
右何の時は付かきなし
頭 柳の庭の松 行燈
瓶と云ふより山家の体附と路柳のやゝよく
後家の足ひしきさまのこゝろ
豆腐つくりし母の古巣より

外ト 行燈と表家と見立の附也
山海の母衆

闌曰 表の古代は嫡と云う極て行燈に造りまして
[illegible]

作りて当中
籠居し
元政の其の秩も　ゆかしめべし
其の名も高き深草の元政上人は彼法師
に母に孝ある人にて母を伴ひ身延山に詣で
詩歌世に伝はる之法華元政は深草の住せしと松本
藝同会の本来未来の迷ひ心中の死を弱し憐出斎
して其道は死す依て悟りて黒園の道に在
となれり
世の人は我を毒と思ひけむ
我なる人を厭しと思ひけむ
伏見木幡の繞花とらつ　稲荷
なる其作甚面白く元政の峡い渡りて外れてしみ
花は雪中の散るかの意まで之意い二の表す

さしたる曲なれども
六曲と附けり
五番　元政上人より贈りし本の夕顔と西行
花なりと作られたる由
を
附とり
以上深草黒摘を挽菊て
菊を売返されば猫ひきて捨菊の種を蒔て
法華の寺の心起らずの附なり
すゝめの日　のみもと掃きとまず
猫持男情より志の花の手帰足飛の命の
仕舞をめされし体こ
水干と香の醍薄なり

闇丈　竜帰を韓白かりの掃除と見替其為に
光を野し客路の風の句を封して野者の句
ひろんとして踪移の差
句の花は揃と約えー
山茶花句品是の高がし
冬の日一部の品等として深の心高の山茶花
句は世し品之の高うしと作りきしまく

追加
いかるの尾をつれなく牛と打ち載
はるいうの寂寞として面白く見るとき降るは
よれもいかるのかくつれなく牛とは共めるを歎みし
ところ
句と
桜　火すあまる松の下行松
闇丈　此脈牛近想者の体と更合使のとより端を
美了事をくうる牛の労れく似まて出ます
候家に共ころとして
みなさまし
こくさ蕪下の亭　蝶なる落ちして

檜火にあぶる侍を五器でとくさ刈とあつかひしさ
其外下着褌 古き着物ぞ毀ゆさ時
さまにほ
句と仕立たる

檜笠 宮をやつす舎り
とくさ刈人山家の風情にして宮のやつし是は貴賤
の論をつくせらし八百ん事で
の付之寄八やつれとやうたる

閑定
用明天皇とくさ刈をさ荊山路すすなる事ん
嬢を恋ひて草子やつし諸名之絶情なる
此縁

あつらへ
粟に蛤罠ん月の海

外云 粟る蛤罠んとある此語甚要とすて
此下の句にあつらへ句の工みひとしくつかう
つりと又へし鶴寄と云字用は海花り
さるて 蘆月まりとして海辺の浪
ろるか
めし

ひたりつ稲子まかす 姨捨山
是は海辺の眺望とあれ甚気色と許
之かゝる陽之表事の時名所他名
いたはる身蒸の手

一説今日部五人まて せし処 相出まれと
より加へして六人の成りて未取表斗
加へて五部仙するとなり
此従ゆ也

水口慶藏
（印：水口）

七部十寸鏡春日解

原本半紙本 野竹文庫藏本 原寸より一分(タテヨコ)大製本
表紙青色砂子

著者 千葉縣山武郡二川村 吹又 鈴木直右衛門
白兎園系飛鳥園四世 天堂一酒叟

（印：水口）

此ノ附言ハ巻頭に綴られあり

七部集十寸鏡附言

天堂一叟述

抑も此翁我家祖形風叟に其校せしを松家秘蔵
玉擣といふ則祖翁の直筆也古今此規矩として
私をくはへすして七部の注解を作りて是に名附
連経この解義を以へとも今猶ときくいましへを其のふ
故多くあれ推量新さらに也祖翁の本意に後の今にして
古をみさりし今新世や門々流々子別も俳諧を業に
俳道をさへ至る固る此解をも著て秘する事ハ決して此事
中にある又此人推推といふへきを知らすも
凡七部の解ありし其時を考されハ何されを日まて
吾子のみかし集の諸論みしくみる　筆を延宝天和

下樗材の風に化せられたり其手風未熟なり
是は甚だ新しく紛れもなき其角風の眼目なり
故に宗鑑れざり然るに此書のごときは其角の秘訣は
其角の書に載たる所の撰集のよし
就中其角の古き書を集め給ひけるを附けたり
逆手の風なきなり

発句の事は古きを以て新しきとす有諸書に
総て三字を以て発句の心とし越人の教へし心あり
されば一の句を以て蕉翁の別傳と筆記せり
或は評者の俳人も此をさとる納めけると云
ることは其人の力なれば俳人を本とすべし

満をさる川てみれの結付と書しと傳へる是
皆もしや此の句也然れは斯文章にて纔其人
付けとを言ありけり而后人さまざまの書ある

脈は陰陽気脈の理ありて客あるは亭主脈と言いて作
の事也あるは発句をいふに宗の句とのふすてなり
一明あるは宗の位脈へとの位を示し俳人位あるを十
分脈と言ふ三ちといへり脈の字あるは高ある動
すべき也あるは四脈を方也脈一句の事なるべし
なれ悪し

脈四道

打添　打對　逆付　比喩

打添ハ其句の姿を見定かもそ有様を添てする
有り来の如し
對ハ其の對句の様なる　譬へは雛といへは翁松といへは
竹と對する句を常にしは好き其人難迄す句と婦
といふするなり也

逆付とは挨拶を切とせすする事也　其方を出より若くさき
間つして其を重ね換換するなし
　今解これは老翁の恵やいの作
これは初代白兎嬰老懐　美を又と限り説し
め又　脇の　其衣

八二

斯と無しいへとも　脇の野と無せる句也又ゆきへといふ
是逆付なりし　説肆也
比喩とは其前句の手を見定めて　付るとする
また此の字此如くても比ぶる事あり
　まあめくや　人さめくの　維新
　　摘する　中　写もく　在
摘する　降を比と又る作
心付也　又てを句に取る　摘字を　其　其外字眼　指字眼
二句一意有とさかく　在り
字眼とは一字を其句に言ふ　文字を眼とあふはす
を言也

きる篇にあらず前の松露か

只をいふに一つかするゝ風

昔閑の素読ひとつなる言となるゝ別風の字

を出して字眼とせし也

白雄序の家敷集白

すゞ枝にかゝれのとまりけ秋の声

漸すゝけ竹音の画旦

是甚情を字眼にさためくるや

かり株や水のうえの秋のくし

夢かゝる只に代すや序

是時ゑに字眼にさためたるなり

此説甚遠きり句論古雄を名詠されとも家眼へ

眼前直接のおもむきとされ古義の古と故ゝり

付けて顔俳の字をとく此両眼のごとくなれは

字眼の眼前さるを一句あらし字眼とは

あらぬ所よりの如し

梅子眼二句一意をといえる字眼を

吉ゝ一此点を休富ゝ似てらひ

語を句ときゝ字の字を

是を似らば語ゝ付たらは二句一意の眼なり

白鳥や吸更道を七八里

をし日あけある紅の烟条

是板本ありて二句をひとつにしたる也　清書
古しきを撰するとは此田語あり

第三

第三は発句の心をよくうけて一句の場を出し
其より所をとめて去べきは作意肝要なり
一
発句五七五は前の上の句のやうにして留り心残る
やうにすへし　文字において続けて留る
十躰の留方を発句脇に言　字をもちいる
脇句のとりて第三字其外三字なとの傳と
てにはかなをいれは

子規　杜宇　朧月
さりながら芭蕉は心の微細なれば朧なりとも　其外にくらし有へし
かゝるのみにしかれは
辛崎の松を御覧して発句を第三のつけ知る
へし
辛崎の松は花より朧にて
されは花崎の松は花より朧なれ　雨白かりしと
落着しられは発句也
朧崎の松を春秋見るて句をもして
是なとは第三也　みつからしてと心をはなれ
すこのてにはをぬきては勝のてにはをぬくる

字句なけを言くする句法也
　暮の山本の日をさし言す
　山の杉風の袖ぬれし
又句作二つ有
　太山形　杉形
ミやま形ハ
　夕霞峯桜えりて帰るふむ
句の頭はとりて帰るしむと作し或夕霞と
上ゟ冠らしむ山ゟ山を定むる姿故太山形
とい言也
杉形と言も

　おり雁よみ定る事立て
これハおり雁まて立て上下を作し中へ
ひね定むると乃り也是翁術杉形の法まで（元る）
かへいは句の中ニ置ても初三と聞へ（る様にする事）
　蝉もすこし定まらぬ啼[illegible]
露ハ初三ニ居する句ハ一句居るく言様する
所有故ニ初三とす
　蝉も爾ニ定まらぬ啼ところ
斯すれハ句の字居ゑする故則義なり

以下七郎十寸穂十五の解（本文は）の行来写本次丁以下にあり

七部十寸鏡春日解　本文

此の写本は墨ペン書は稿本の写なるべく
インキペン書入又は訂正は十寸鏡改本也

ペン書は七部十寸鏡ヲ以テ書入、訂正スル所ナリ

朱書は写本者

七部集 十寸鏡 春日野

春日野

曙みんと

南総天堂一叟 著述

全校合 湖第舎貞斎

湖月樓東馬

東武ハ信雅松井中七名古屋之郊外足尾
村ヲ別荘とす
一年ハ清水掬えの末ハ膳のやしく白き葉
ながら、匂ひのよきを香にとせり

東五ヶ枝折を以て味噌をちかまん　新草堂　西塔梅[illegible]

伯氏文集曰五字三句

外編備ふるの[illegible]

事もあらん

二月十八日

まめくや

さくらちる中

無心な（前文）昔の趣にして熱田宮の御神前の人の

ひれふしたる体なり　さま／＼としたる言葉を盛

あり　其様見するに[illegible]　つどいれ者る女共者

風来すべいの和歌をよみ吟り体まで　すましの詞の序の首

眼の馬秋く迄とする　又奇しき事のつくさを感ず

し桜ちる中を一句とりもやし[illegible]

（[illegible]）

山寺夜月

三ッ太山形よりも位あり付いたる秋く遊とする（夜帰しなるより）

開あり所出し揚たる中といへる山庭といへる風情

作意を宿

尺づく

鐘あかれ

三ッ四句目名月とよい　雑体なる軍用のさまを（数代ずり）

[illegible]

浄風なよくしげい酔帰

（蛙文なし）

民家房展の草移る酔帰と出て　すぐひ帰と候

むなしかもめの方向きいつる所耳採をしすまん

甚陽の付きて所を定める也 名手の從梅とされりもやし曲と云ふ

墨は沖

須エ寺は

その々筬笛をしるく

以須い將軍帰の子を守め給ふ所也 於出く

以風は今もしも軍率の辛苦余程あり

墨は沖の足ゆゑ余希色ずりの附也なり

須エ寺沖の足濡しは附くるなり誠は笛をしるく

皆紛言聲を作る笛すべし余二と名付

とされ 什とも云

まくて此晴の日より甚者つき附之與頭也鍵歌

全風晴れ日てもしきと婦小さまと又へれり。今は

太へをおとくる流新あり

就しきの婦すい婦の製なり

と云ふ 着今何の摺まて

二

以下一曲又の世部集 大久保得の第四、（以下ウラ迄）

ナシ

何丸云 文王のもやし 此院世上の従え 文王圃方

詩大雅

寧甚かりけれど

串挿

笛をとるく ほゞとまを引出して太へると

竹ふうてと云事は何をみて角のるさまとな

三

一説ヨ書のニ十字ナシ

天堂

知とりもすこ等かえれくさ角すり木衆は
憶のあく雅す翁とり居くきまもえ
旦暮何ぬい実淡のみまて俳諧を知おされむす
へての稗みまかくのめし 諸経文王の宮角を功校
まして附会すまかでとし 且て虚実を知ら
さるまり
其ろ諸注ありと云もつるれ 五常も並さ
し益一説かあのく 湯角をとき く とハるを盛
代の德書礼楽まりて後る代を盛する庚まり
とえて後の文王のはありと 林はやしとまんぽま
と云てまするは其秘書林まと云めく周の世の
志けり 是まと林とハふ云へりていふ撰りてすし
周の良田を撰のみ本来古様のさまより周代
のされ田を撰むと附て良民の風格を定せ附
こと此説甚おもしろく
子れ是ま無せあらし

次の角本の周は徳風洞保の附まてまらてあとの穿鑿
いらぬまりし（天堂の倍）

此あるは諸註有
と居あらしず抄出本の抄
七部古翁傳のはら
あれば別傳の書
まあらば数心の
今まは撥去まし

西の原 諸説
肌をみ
仮蝶
五芳葬 隣ま
わやくとのみ序集畢里

五の条の角の方をそれは諸注ま室の徒民よ
のべ（みすまのさま）論語白居子徳風也ナ八の
統ま也と云る数まりと云れ勢代のあらさま
のくて良因の見のすけまでし 角ろき字のわか
ままそと（[illegible]）撰りて
肌うをみないと頭をはとくと云（[illegible]）附いえ程まで

の隠逸　情のまゝにすゝ親しみて繭（もえ）出るも待るし
も目しみさすさ一ゑハ生死の期あるかなや
と出觀しつゝ觀念の作なり
令十俳諧人にはなきを知らせよ——浅ましき所
作のまゝを納むる人と俳諧と定むるを知らかす俳諧と
とまる句の作者なり。其角も亂をみとなるのみすと
跡は俳諧の用ゆ花明のさま舞も此一編の隠の

二句　原定なれり
三句の捌は人の位にあり　ワやしとのみ申しかし

形容がくりとつて御申　金作りの仕立
次第　青柳能と錦と見すして[illegible]と申て大器
ヨ申して早く/と無く里と云雲丸を[illegible]
行く先より中々の果の祓行て
大徳　何れも鎮齋かに祭礼座十八丁すゝんで御道
三月尽て祈りをなすめし申す蘆と云ひ神道と云ひ
他の神社の例あれど
五老　何の神社ゐてもよし　唯あしらひ付けにて調ぶる虚実なり　虚空の利ありなるべし

十一

花の長男の綱手くるゝ哉

何れ云綱手ハ金銀長男

十二

五老　是何の事にかあらん古人の心をゆかしむるの花ならず
小児の上ハめでたしかしん長男の上ると云ふ法
但て元服を知らす実演の事例もし言俳也
る後世を遠ぐる新の如し　長男のあくるらん
俳諧あるなと香気へ

柳ゆゑ陰に宿らる輪かな

くかゝる日の暮しぞくなり

うつかりと麦なぐる家に連待て　風

鳥ところに棹さゝる　相

足袋をたきて場ちかし　分

いとかなしき五位の針　圭

是は去我の[illegible]付は[illegible]

前にも男の社にあがりて[illegible]山家[illegible]のさまなれ
見てかくまき鞘[illegible]の[illegible]まで[illegible]
すけてみるまと[illegible]季の結び[illegible]
いなかの柳とさし形容[illegible]
[illegible]くあり[illegible]をうけて[illegible]
付[illegible]妻[illegible]家[illegible]都の体[illegible]
すみなり

[illegible]の付は気色も[illegible]柳の[illegible]形容せし[illegible]是と[illegible]

白壊に棹[illegible]急壊の附と[illegible]中に棹[illegible]と

[illegible]

いつ[illegible]の御[illegible]帝し[illegible]又は[illegible]
かしは[illegible]死[illegible]中にも棹
の[illegible]人々の[illegible]法にて
[illegible]
王[illegible]甚[illegible]夫[illegible]家[illegible]の[illegible]
さし入る[illegible]書[illegible]
五位のはり立八さし[illegible]人[illegible]前[illegible]と女三
[illegible]入道の[illegible]と[illegible]
句毎の[illegible]附[illegible]

[illegible]に云
[illegible]七位位典薬頭に昇て[illegible]

佐[illegible]の[illegible]さとえ

梓の木に[illegible]いう[illegible]

はた[illegible]のあ[illegible]見[illegible]

紅葉[illegible]豆腐[illegible]ける

念仏宗は林寂なり
極楽出離を絶居る傳りて
物名の稀の名に障る月
何丸の主位の鍼医は障られ

十七

西方浄土として只却て荷通の変化なり
はかなしのあはれかと云ふは壁中の静まると通合とせ
しは前く聖王の身落書すと知られまるは時ある
など断はいとは然え越人か足跡はせぬ事は隔と
いふと組前の記録えと唱りのたりしと思ひえしに
是は無住の識医の打聞え大宮司はなとの神と称て

十七

あいとかしこきといふ
天龍寺の宮司詮す死るまり門の傾し宮
司といふの他意伝きし是は食器の付方世次に
門傳し体の相手障す時ると傳え甚深なり
用結を何さし訓まず細る
鉈朗の句何丸主専明のおしきら

○大宮司も滅亡の出入する様のたし

○門からもきし
襟より相障
時宜と云え
時節の附せ
し也、状さむ
しまき雑とす
せよ

一 青すれり とい上てまちかくしし

○けりあり
は云伝へ
めでたき
ふしてげる
けふあさく
さやと心を
残す歎き

五帝 けり〳〵と云ふ論さる事よし 委しくわきく
黒み書きとかきあれて浦なりかと云ふ例の理
談せつきし黒きとみ婦とてられさせてありのみ
ありしぬまへど婦など書きまへ給のめの
みそんや 十二 は曲節の宗上言語あり
記の名あり し 記し くれへの ありつり
めでたし

（十寸鏡は 常空日を 入てあり）

念仏の句は 重譜の中あり 附出 （ほか金銀）
花住の 附甚 仙意 田し 蜂夢心句の 面白きや （ありき）
新家あり と云ふものまつりし 大鏡
語の名を呼ぶ月と云ふは 寄合日 申沢難する
米やあ印仰と云ふもの米

○拾と云ふより
るを金の秋結と
付折り擬るとも
近作まきしを付き

此折の数付一句海部独本よ渡り下がれり
金の海
紅葉を
明けて
絢爛ひとつ
世まあ人の母

八

紀念のかゞみ

（前頁に写す）擬宝珠見えて[illegible]の御[illegible]様[illegible]
[illegible]述付[illegible]ありしとぞ[illegible]
[illegible]の[illegible]と[illegible]り[illegible]鉄[illegible]の[illegible]体
[illegible]限りし[illegible]姿の[illegible]みえ[illegible]て[illegible]
[illegible]くしわりし[illegible]の[illegible]親[illegible]（他より見[illegible]）
[illegible]処[illegible]ん[illegible]文[illegible]し
白[illegible]の[illegible]草[illegible]女[illegible]は[illegible]んと[illegible]
[illegible]子[illegible]の[illegible]あり[illegible]余[illegible]を[illegible]より、
世[illegible]の[illegible]は[illegible]脚[illegible]
[illegible]づかに[illegible]水[illegible]姿[illegible]みえ
[illegible]も衣[illegible]と[illegible]
[illegible]のありしこ[illegible]方[illegible]べし[illegible]の[illegible]も
[illegible]ひ
[illegible]

（其人の[illegible]）

いく春を花と共に開しく
ゆくも見ゆも名とりぞあり
白妙の花菖蒲すりのうつりに開きとせし江[illegible]と
[illegible]どの[illegible]の[illegible]さま[illegible]を[illegible]
[illegible]開しきを[illegible]とうけて[illegible]ゆく[illegible]
[illegible]とく[illegible]

三月六日[illegible]亭主人

[illegible]や[illegible]山の八重桜
[illegible]の[illegible]
[illegible]一名[illegible]と云[illegible]八重桜の名所に
[illegible]山の[illegible]八重桜[illegible]やまんや[illegible]

九

幸し残とて五文字なく季語の趣業を見せさ
俳諧の発句は和歌とも遠ひ文字の数いふ所は
絶の五文字揃ても風景を悉く是るか乃ひにいつき
山や満開けて夕涼或は抜字世業韻字の音す
とろけたと是 出来をいけは乃会まさら是を
けむ客に頂き
服よく其字毛を通さん寸々の浮とせし乃ち季語
は浮きも名あり旅と浮と對して而
出づるの
遠きき眼
まその旅
にまく
松風す

夢殘し坊て出旅つ月
笠自量大業
鳥あり任せ
其身すら旅の体と明けし我旅の哀れとを
服して千方面を聞かし残し人の往来
まよふ其日も忘れさる旅情をよくみせる作
意味なき
句目俳便く任かせり はよき流れの旅書
春の晩情とおもての附句
松風ま倒れると云ふ 俳意味に集れの用より附
旅の姿と附ける句 任ぶし附る旅と
またその旅と旅とし俳旅心とよめ見し
夢残す出旅つは俳旅人の心ろふし出放る

仰塔の仁然として見給の名立以無処ニ
雖白き紙ハ印中紀日仁徳天皇卅十三年ナル
謂ヒ王子薬師公ノ麿の名匠也雄黒斎
之ハ帛紗ヲ敷テ故大義ノ様ヲ絵ヲ云し
こつまさかハ九月十二日午の下とよ所為ハ出ヒ名ツと
呼ずり通ラヌりと云ヘしこ笠白きとハ了能哉と
帝ある陰まで赤子の香ひ乃南日し　よひ子ヱて
をいは牡丹のものとものの伊ちまでし

表河
咲かぬ車
饅頭て
何やらゆかん桟敷のまへ

人　兮　薬　人

賤夜ゆく
花ふき傷す

表河ゆづるハよひ子みそ子とよばるる人々また若て
二人世をと遊人と是も心ここを附まし
咲ふうに車ひく者ハ市中の閑居を思ひかへし
都ある咲をいやきハらく車ひく昨る千早く
火宅の甚世を新人とよぶの附も
饅頭ていまのひくつけて咲ときまる宿も漆
より見色て手用意の饅頭てと附ぞ大佳ハ柔
帰入にもしおのく入給まで泣り出すまり余
情とよぶし
ソも帰ま別るも遊て大ぼの主なるより
諸君の声々ここを中より何やらゆかん桟敷の
き子訛りのまこと作ぞり　星野梅語の閑潟のまゝ

夕日の前暮き山伏見物[illegible]趣之
旅夜の附姫之娘等の事と言入会てあれ
ます遠への蛙附の度覚をかし人誰ん大曲式上の附
もおきものく出会あれますと又名詞ある有は
且てお遍どの面の小みを何に日本は其娘あ
るか成さ一万ロク京は嶋嶼ます秋分長すのさま
あから信者の手信と荒事を見て教へさ
例すと大臥のさまるへり

里人は荒と旋す妙の図
門すき後の松逆橋
さびかる木根の花の紙とむ
秋かとる春の陽の山

のとけしや荒磯の波伴の帯　人
内侍の提げ物の図　公与
里人の背は方日の原嶋嶼の今成林の序は物旋す
ざまと史と里人の随すれ里人に呼とすと手教
とえし
若者の日毎の隣ますより供れの餅と見て
蝉は木根と陽暮しこも
室屋直く神を倒れる西ご店おとま根のまじ後は
屋曲ちるまで花の紙とんとうて風はなり附
風は塔への移りし
紙とんとうてようゆかする春のさまを附して
桐屋せきしいせり湯山権現は撥の有すること
汲の出銘

國人日日高物語にのとけしや
のるい貴院さまし
昔日向の人傳

のとけしや内侍の提物の図は…（以下評判之上巳七ヶ条六ヶ條の第五）

○とゝ此の地
役所有し
此て何ちある成

天堂上日（三十五丁）

洋判しなよ
也何ちか
細るし（十二十六丁）
以下ナシ

婦人と同船して牛込より伝ふる○文読出て
お国者岸のときく彼出読入様て此をしたり○向かひ
からうて見ゆと是をは言はずのみれど それより此名
又某人は何業様優勝者へ他の家業と父と是を
咲くれ是れ甚だの方言をも何宗の流儀の世界と呼ぶ
言ふして近頃の流行雑話の様相也上海の
と言ふまで某人の内情を某人は彼の言ひ
よければ世の人はまゝことよければと言ふかけし
話もゆるさし
内侍の様は世への美人の国を探み婦しけるに
言ふ何者はわかのすゝみ経世家の謝はるると美人
するゝて世々の国を持つ所へ

細見と軍の中へ行けり
名も附て軍とかいふ

大くは念仏唱ふる東軽
かのる 無稽なる陣也
紛々の兵某の為め拘捉て
都よ廿日早き春の秋

内侍の哀れしの体より軍中を思ひ出て白雪の
内侍の風貌見る別れ思ひ弥の併と付く
名も勝軍と軍中の詞ろちゞに細思入て
かしづく土民等との風情
一説に大閤が国王陣子甲斐国中にて村長から栗を越
了りまふ立ずは宮侯了して在
大命の念仏はよりのふりけりて東軽子と言ふ念仏
めづらし念仏の信者東軽がしつ了正直一遍す

おもて無楽してぞよき御之などと云て附し
銀杏の葉なるええと枸杞葉の類とおほ風雅して書
しよき附とうりし
枸杞垣の見込より都はなるまく表杉近き集所より（卿の隔有）
早きと云は今日都の上の
風情と付たせし
一　秋かぜ嵐は何事草なし
こは説あるまさうきのみ
南京の立ち所かはる未練なき
ものすすむる詠かく
田舎もあるとも観て思ひ出れる

力のすしをつぶし中のみ
都は如何余所より早きといふをうけて如何ゆかやり
ある田舎寺の季をはなれ一秋の風あらしと云かけ
たる是は一句何事も都の風情あらぬ
ようを附し（是り都 卿の比付と云し）
古は説あるは此の寺と称るも風情の言葉少すと
田舎寺は古代のまゝなる如月を選ぶかるにさと付り（思の付し）
報恩講に具来事毎古度
二月晦子時来翌午時帰る　五月十五日卯時来翌巳
時帰る　七
梅あるを老若のいかん表を付んとも陽炎のむ之あり
（次もると云る句作）
安すらん時て長命のあてかよ老人之婦の金殿
（細を探究）

子のさかえ故人の作 奇なる 紲こ 春の袖と作
見るよりもやし 西の風に [illegible] 袂 [illegible]
[illegible]

田をかりて花見る里 [illegible] 貴人高住を [illegible] 居す
其の里 [illegible] たる [illegible] のはなり 是 [illegible] の比付し

次第 力のましと [illegible] 代々力 [illegible] 羽をうけて力の筋
見せ の [illegible] 代々力 [illegible] 節 [illegible]

漣や三井の古寺まで海となる
[illegible] のみえて [illegible] の山
見はらし [illegible] のはさ [illegible]
君の [illegible] める [illegible]

何丸云 漣の句に 何丸云 [illegible] 井 [illegible] の匠に

五云 [illegible]
五云 比 [illegible] 三井寺と [illegible] 山法師も法師 [illegible]
古代は [illegible] 多し力の [illegible] を [illegible] と [illegible]
の古寺の海より [illegible] と付 [illegible]

ナシ
次は漣や三井と云る [illegible] より [illegible] 山く [illegible] の [illegible]
を付より

[illegible] の月 [illegible] も [illegible] 月と月も [illegible]
又 [illegible] 一大 [illegible] 阿佛の十六夜日記に十月 [illegible] 早天
[illegible] の山 [illegible] 有明の [illegible]
てと [illegible]

君の
勤 [illegible] 起 [illegible] 附 [illegible] 千里の [illegible] の
大 [illegible] 供 [illegible] の [illegible]
け [illegible]

○
芭蕉翁 [illegible] に云
白花 引 [illegible]
[illegible] 其 [illegible] の句 [illegible]
山 [illegible] より [illegible]

三月十六日 旦暮両四家に帰りて
咄のみきゝて ゆゝしき盛況が
銘すあるさま 其未来のあり
ゆたしさとしあるさまくあり 足しあれば又重くなる
又億くとなる 然るに此のみか身旦其未来、指摘の句に
あるが如く両四家は世の人の評判を得し 咄の知の事のみ
まく寝泊りして
派則旦其未の撰を評せる漏らさず世の其事多ければ忠
告すまれてござりとよく存ずる事なり
厳意す岩本の其よきを知りて 越人
此外の越人の今朝しきも吟えた唯雨洞の厚情
ひまなりたる其三之岩本九日に帰りて雲丹

とよき物語にして至て其事もありとき賀家の体
とのくなる其三世沼翁の雲丹堀之園の梅ひと云ふも
岩本まかせ すゝしく人と見たる馬の子
立て多くかへしの麻の葉
芭の様とする 傘のもし
今も其の年の君の此子なるべし 人めでたく
見る山家の体なり 然るに中の梅の子の体を芭の煙し
其の私は此の用之
後継 磯野子 旋風児の俳の集より
出の日より見たる里

今の常とスルは三世一切は姿より施也見其体を定める所也
都て文傳言見得て見く用梅花も是をも用ゐむ
後増の係隣の折紙甚敷がしん
岩の首より説て是亦とスルは大境の擬山は唐の長者
かゝる方とはは室は灌君志の開河も心は自らて
付けて紙を早鑑説[illegible]是は我
るとすれば尋る降りて孫興児の大且死もや
と含めしたる作也

ふる日も瓶焼やらん畑たち
ひたきする桂の一団り

瓶焼に来よりの作用し丈備前も志賀焼とも
浪人とも見るすべてのよるべき
織り物の綻びは甚豪きと見ひて畑たちあれ是は筆
筆者哉中に住し

尋ぬる塚も夏隆下り
結ぶもとん 桂結の松

此の詞見きと云ふは和歌の主君より置とも
云はすと作ぐくと[illegible]空字の説下とするし
桂結ぶ松の作の桂結ぶ松風情をみる字書なく
此の作の和を定めてとい其の付あり
此代桂結をの注釈せんと多くは岩代の結び松とし
まい文字のみよるの御説として其のいんの御作として
とすると御門からの結べ
つまり讃くおぶりさくあれはかれの是のと結ひし御
る結者の心結へかのく云捨るり

岩代結松の詞

岩代の浜松が枝を結びをき
君まさきあらは結んと契る

七十七

今宵は五十日とて[illegible]同十日菊合
室[illegible]

咲わけの菊ある[illegible]白露[illegible]て
松の[illegible]かゝる[illegible]
卯月の[illegible]みつ[illegible]を打ぬ
剣の月[illegible]

[illegible]の[illegible]とひよせて[illegible]
[illegible]の[illegible]一色の[illegible]せ[illegible]と[illegible]
せ[illegible]一色[illegible]と[illegible]
[illegible]

源順ハ

[illegible]と[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]江戸の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]名[illegible]の[illegible]
と[illegible]白く[illegible]
[illegible]花四[illegible]よりハ[illegible]
[illegible]みちの[illegible]もむつかし

廿

永日や氏銘を感じる心なき
寒子は世るさみされの中
是迄八分季續き地板より末ゆるうつし来ぬ
こゝ近うつす甚季子の傳方を感へし
先主る傳堂の越安とも山門の見の庵號を足智
て皆行錦木四堂庵輪と云とえ四堂大博ゞ
此皆別れの月とらくより一枝まあと見て旅人の
やめくる梅え花とひるし
次の甚ゆくみちとハて笠の跳ね行きて旅人の
別盃と其の屏とらくよ傳方足るへし
永日の一句寒子よく言廻しより金銘を昨日と
思ひとする暮春のうつり移るを
夜まい永日を表すうつしてさみされる香果哉
永日と題目をさしたる
寒子は字居とり離や也

紅路が鞆いかりて来いるし
連歌のもとまあらしいてえがし
滝壺る蝉揮さけて音とあん
岩苔とりの心竟すさけられ
ひさふりる花着てあつく世帯よ
並 功程も 渡世林庵
一書集武田信玄軍信玄への方とな来る紅路と
東山殿よ仕へて兼ても甚し此人利休の師として
高田保夫の室す隣るが故よ右来翁とよばれよし
和漢三才図会 まあり　前ゟへの陪いさみされの露

はよくべのみありて実はすくしと云ふは、飛白と作し　面白き体也

宗まさん紹巴なとの名器の瓢のみありて実はなしと
又こおかみより連歌の今もとおもなりとい ふる
俳諧人連歌師なとの骨も滝亜子宗鑑もしめせて
の附は実様なり

井蛙抄に嵯峨の御附　ものゝ連歌有
けり　女房　条内侍の将内侍　下ハて　座中まて侍ひ
けり　民部卿入道　女房のや次まて　御簾の際に何公
せられけるか耳聰くして　御簾の外にて聞分けれは

始より連歌も表まさりけるがあとまて数寄にて
山より来る新て御簾の前まであまつさきて侍りけれ
は　これを何も聞へすなりけると云く
すのかくりの有ることを　すぐん　附は実性
宗艦との付は御簾といふらす　幽谷のさゝ葉ひ

よせし所さりがたくめつらしきものと見侍るる
又作者の事新なり

本歌　鳥苔生大石及水間隠処青草二両草茸
なれもノ也似苔非苔此則石衣也長者四五寸計
蓋尾松之生石上者也

ひさ嬉りなれは世の人すべて名利に迷て衣食とも
になはむすばる也其中まつどれ者てかく老きと
分かけの葉すてよと比する也大はとひのとし
次は隠遁の人のしくるを事まゝ見捨て繡羅金繍も
時世をさとり世物は甚二枚■も深山こといふるし
もかくあるべき事也
よいかなす〳〵

何事も文の為に変まするし

（後は見習て隠遁の人と作らり是にまなひ）

茶おと送るきぬく〳〵の月

風の音き帆のみ子の綱の下

千羽のみまとの輪とり笑み

あらましのざこ積み荒し六て盈ぬ

つらく一影鮮の和わかし

蛸まらぬれ浪み盈起きて

右方
夜の記る面庵の地を少地をしめあはふるひめ

垣を囲ひて国と別かるく盛鉾をとふゆき

隠者の併せんて画の義を見安と素めし作れる

と言へる作のあり

雲居揚げの方
笠積みあんかりぬ君の笠
蕪村を送るは狂寄せす一首折りけは

と云へる作面白し
りの始出しきぬくの月、

蕪村と送る故人の気性より出屏
行さま始め盈見るやらし

綱へよ蕪村後図みる画集の上により候てあらは

夜ぬは一軒して綱へくとてる言葉のうけて
是は蕪と隠と
対しる作とし

陰さらは名羽の綱よ行んと云ふのつりて舟を

はの扇き冊は舟よ縄のよ発伴てる羽のみまとの踊

夜ひよめんもよいと拵ふつ生は己あるせ

扇名を解つめ人を女と見てあるかり評判する

造まよましのざこね笑ひと名ゆるでと婦見すり

まよ人を笑きるし

紙扇揚と云ハ新大原るし荒分の扶男女殿女るる

席を申して故ると云 仁文明那辺す立坐

文字まよ
双関す
詩討
るる
そ所
ヒ云了
松

みな四月廿日は坂田助廿子男子を今なる勝多悦偏
を頭にらる生出しと云ふ
世上のさまをみるにいづれの女もみな花見さとねの物か
ひとりも行ひとて、みて悦びなき世を賞されは物へ不
負の心を嫌てつらく一期智算の名もなし　とらふ附て
つらくと見る言葉深くかを聴したる句をり之は今時の
家にも気性の偏るなき一期智算とも呼れ給と見て　付と云
惟春の若れ限と作しなり万慨嘆嫉妬・全情を見へ　対する
何る

餅を喰て祝ふ君が世
山も花をかしけん越見ん
是らす晒らす雲と雀噺

（此解なし）
岩れ限とえるなり　のかつりの餅は君が世祝も何世
山は花と実る正花と　是香る餅を喰　つかいと云
るつれ風雅の作りさま
岸なるむよく岸より作るも

追加

三月十九日　　舟泉亭

山吹のあるかき岨の岩あら
晴れのみて下　る岩桜
登るみ（の通る細き）脆陵見ゆ様の水
のみを下つなると見え一作あり。（山吹する咲きの新涼）
めの自由　餅酒出べき遊ありて

行年やまれぬる土器

泑三隣の塩竈のやうに保昌すとありといふ出
持ちを深山の体とも見さし
備晒すと父まゐり如幸も近比すありやと心を
のさまなり

　判日と相ともつ随従のいかめしく

前句初春何れも春湖院の翔りに文代せしより
多くは正月佐渡吉則正三月加賀宗広吉三月
ある国去と高砂法の殊いかする
屠蘇は一句のとりまやしとしさまを随従の
さまなり

　月あき空の門早く明

判日のうつり此月あき空と出て其まゝ月次まありて

殊ノ

以下無之

春日発句解

　昌陸の松とは尽せぬ御代の春

昌陸は里村氏連歌花下にて元和年中の人なり
今年正月十日松の句ありて柳営の御連歌に花
連歌御句奥有かたん
代々法眼任す任す

　元日の木間の競ふ足ゆるく

是は日の影のおそくすて足早きも元日の都子
優なるは競ふのめき日の足もゆるしときるこ本
関は松の間也

　鶏鶴伝へ人間一世
如年鶴有陳平

頭光の縁く絵と皇民の年了めてひかるく
御世のさまた年の有さまかし
稲する体こ

川ハ松茂葉園の色宜しく
川松かなかかけとも昔薫園へ露ひは楼くるを
宜しと松の縁ひいらんとての作也

鯉の名れなる間く描白し
白氏文集に梅花欲開細魚入龍門
はなはずるまあらん言ひ花の姿いまへとて
よみ作る
なり

陽の人見牡丹画ある開きけり

是ハ講足人見れたんのあく霞の中に開きけりと
いふるなりして川のもは就しさるも

陽炎も元日国の暇なる

元日の優なるさまに山の陰家の隣まてかけて
いかめ豊なる眼の景気なり

是むらし霞ぬ先の四方色

早天に緑出一松の春こ
実にいさぎ見れ体こ

けふとても小松植るし年の宿

昨日の子けふの小松川植る業一み出今眺ろうーめ
子か小松夏ゆゆやえんと樹年は説とみまする
拾遺も村の判様も御有す

命あの残り松陰のやとかん

め開きさましおもしの露に咲は
了よ来てやとらうて
足あとん　さくらを曲る竜二つ
是は櫻第おこて西行上人の遊せし[illegible]
四国まてくまりしまま　其傍也　櫻は[illegible]
性を[illegible]
[illegible]
　　枝ありて櫻の道き源の[illegible]
是は新御の名高き櫻の[illegible]流枝ありて深め[illegible]
名とへるや
　　山里の筆橋をかさね[illegible]
筆橋の名[illegible]死なる名田の筆橋かさすれ
[illegible]之[illegible]山[illegible]

ちる花坊とともに
　　走りけや去りて[illegible]空の花川
治る[illegible]山伏の法具色[illegible]流すかり
と[illegible]草子まこ[illegible]ん[illegible]すとき白花を
開きて[illegible]斧[illegible]一[illegible]
まで[illegible]の姿をとへる[illegible]疑の念
　　尾ふくなも[illegible]ろや松の月
隔てく寺は[illegible]新[illegible]とへる[illegible]是は来ていなか
あし[illegible]開[illegible]の[illegible]を[illegible]経す[illegible]
尾[illegible]家の松の[illegible]白しとへる[illegible]
　　八峰をかける[illegible]を[illegible]

三

具足着て魚のみ多し日見秘

木は言と見とあり非之れと言とてと言と
意味あり書物の体目は前之と云と
待恋

表の夜を夜寒とし見おぼえ
昼も来ぬ夜を見ちらん
恋来の音にけれハと心にうき　新劉の句法

古き竹の子の句
古き花を子の匂を書あみ家連てあとあ
藤黒ての後ハ居らぬ子も京のすさき　京子之
れつこ哀さは晴を　やらせ
ひつまんずし

十寸鏡末若綺

省ゐ

水口

七部集大圖條

天堂一叟

七部集大容傳口授

第一

冬の日集　こからしの巻

こからし　ひらん　丸画絵の局か物好か

三句の内

ちらかみ

諸註の説々を捨し而后本傳をあく

字義ハ此体の解会を思ひよせ色

々色を集め約るれことを示へし也

蘭吏の説也　但俳の捷要ハ内経

多岐也ト　或人云　三ケの正体生肖

解会のあとハ三ケの体をしてハ関係ず

是ハ梅さくら松なとの三木の一瓶ニ

るべし或は舟の雲(?)花揚花折枝
をさ(?)年ハカチさへつゝ花開とらふ
たつぐし　次ハ卯花のさし代物など
足禁て帰るに卯月のさま望るに
蘭更云　都の事ハさまりとて歌枕
居衣の集り花探る花見ハ三ケ日の間
の外ハあらしと称しけり作也三月云
なきなりし　太祇說云ある句
は、内侍所牧多女官の並居る体
なるを八内裡にて思ひ寄る也
紀事日内裡清涼殿南階ノ前在鶏
会其鶏諸家中雲客禱之出作祈
汝市預此事決勝負云云

きらかみしきしま越の物語也
外云　箕になる國ぐの産物真珠付物
越の子とかりを貢献の熊皮まとし
足等の説云すて代と所々
きらかみいさよとん日本産真珠
一説に　出羽越後へ出る所の街路に
社ニ社有、謂ハ白髪明神一社は羽後
廿刈川邸有鮭後川都ハ地なりて
之未事北中　悪くやうれんなり
有田島ある也　白髪明神之来物
此を好み衆の足を献れハ毎邸
今にて成る物吐と此例二月云也
蘭更云　三ケの間など都ハ早く花咲

斯随くるは越後ハ宜きへ日更に等
と案むと三ヶの津の美するとい三越
路の作るその妹付之三ヶ条の聯会
越後の此いかる可体ず曉吉田
三ヶ条越後よりうとを詠むる了有い
いさむといふ掛りし白鷺の老人
手合揃ーて案内するとて也出来林檸
云、土朗、道彦、無美皆同意也
天堂曰如説皆誤也三ヶとあるを三ヶ条とせ
は甚意得た又多軍とある連歌会
とハ得すべし此のあるつ所の諸相先生ハ
皆名家なれ余不きハ不審也
天堂云三ヶの名は三つの花とすべし鶴軍

ハ名所の聯りとくぐする会也解子
ハ春秋諸会前会多会まて三ヶの名
也名ハ当路の名まてあめたる事
これまた正ゐ論の花の本意をとるべし
附心ハ出傳内侍左右ともえて多くの勝
方と争ふ姿風流也
次の其を於是に学草の材と云ふべき
ものと網ききと比べたる此辞の体方
也都の風流と連歌のさまと味合
たる也
実は作者の説ハ細川玄旨法印曰
連歌の其をハ附なきも本意とす
と此一言にてことごとく了悟する也

第二　炭売の巻

全作納至たくさべし

一花は法さとりの徴とするなり

蘭文云　梅の花は魂と思へ今こそ古の
花と観むとする形あらん或知識の仏
まはまも徴はなかりんと志ゆる可不由
むの徴もなりすと自捨るさりけり

天堂云　蘭文の曲解さりん聞くす此
徴字は勿忌徴悪とふって物をさりん
のとり也　執着のこると字をた遠も
たり文言の解也

徐六曰「曲は甚むつかしく解成りがたし
第一梅の徴と云ふはあやし

韻会云　黴字韻敗切黴バイ　音バイ、アヲカビ、
説文　物中久雨而青黒也　志ゆるに此黴
は衣紋のかびせ也　是を見是を解せ
ひとすん場の数在のひと立つすべし
合みれば月とは執着ある心は是則
五欲古巻の境界と表す迷ひ業障
なるべしと悟て甚有落葉を捨無
為の道に入るひとの心ぞやすらむ」

第三

「徐六　次の句を言す　欲免を云ひと云ふ句は
前句の梅の徴を捨ぬるは愚蒙をすて、某為の境にいる人とみて句と
付たりまた云ふは一段の行也山咲は
口無しの縁語なるべし」

関之云　前花の観ねより無言禅師
なと見出したらむ又み可栗又
山吹や無言禅師の壊衣
衣の醍醐色ハ山梔ニ染てあすな
小はるや　蕉翁曰　此句ハ茶のかをり
世花錦遠と久ふしてのひと云ふる句
あり皆蕉の名也　此説甚非也
天堂云　其つハ心の俳諧ニて文字
ニて さばくものにあらん　数奇ハ此
て候ひてつかふれ唯呑と云字に迷ひて
さまぐの異説をなせり　関之聴者
翠のかをりといふハ忌者のさかし
げる冬待細望なくあるべしと云ふ

ハ秋句のつれにて　此後ハ其の定也
又それハ其難解也　心の俳諧あ
しらひ名俳理上と云ふ事急思の
婦めるを感情しし
蕉翁まくもの徴を拾ひ
此機の徴といへるら作者の前にあ
りて其言の意也てかびの如くす見り
るとも云也　者ハ観ねて変す道とい
煩悩世界を捨つるといふ是を語絶の
境といふ祖翁ち仰せるに　此時集す
世の中をさくらと共ニ徴をとて
も一つ斗ハ許ニ
蓮性法師
花ニ遊ハ自情遊せ人又あや有法

上

の雁に手揮しをりと見え次へ他僧を
附ら倚もの吾すハ拈む微笑の頌
[illegible]て数多のむハ五無の作也是也
日の詞ヲ世の高ろ甚微妙之極空
云和漢の是随分の目と以さハけこ
そあらんこられ

五ヶ趣を聞至とあれと是ハ抑く
なるへしと疑の徳也納至やら何やら
知られ候ふを[illegible]の擱ハいかにや
[illegible]細至両ろも今[illegible]にあらず
西行上人信隅さのゝ寂りにて居ル
の[illegible]にあひものをとゞめられし[illegible]
者五ろうれよ[illegible]ありれしれとハへハ

春もりと斗まさくて其後何事と云
も春すと有 此僧五言も数多の
おとハ心まへし
此頌ハ日出し忽破五言の緑[illegible]也なと
いふハまでつけの頌といふもの也ありハ山
家集の俳する歌のま也
聖西 春の日集春めくやの巻
なる みのし風翁
み又の まやしに 丈土へりて
何の几ヶ大陵と

廿四
廿五
別冊
春ハ
紛ハ
[illegible]

第九　子規待つ心の哉あり

の第三

引捨し車は[illegible]

[illegible]

即其[illegible]と[illegible]

第十二　蓬莱の花

[illegible]

西王母東方朔[illegible]

天堂ニ[illegible]

[illegible]

[illegible]

と云[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

死ぬ人か猿とんと西国巡
朔の長寿もまた何人か何る月は八九
まと言ふ文章ニハ長言ぬ論と云
其への附カぬ言とかくへし

寛保二年
夫登七部抄

初
暁道や萬代の開山師

其ノ太白ニ取ル田家ニ萬代ハ
開山師の机と申ス事ニ而も立
ることも
天地曰、晴和めき揚（春）と主意ハ
として其時陶詩語るの如く人
の出ルことさまに暁道すること
群よまし人面すりのさまる
萬代の開山師なりと云ふこと

廿五 夜後やもとより何ると作かし
去迄の師は何事かしぬく
古風のすこと
作意 善悪ちと解とハ其外道
迎て解は何ハ側理あるまれハ底
にかかす理ある其他の解力細工て
二ドつけ多し写へし
其善悪 少経ニ作から善悪とし

廿七 菜摘渡一はのまはるなり
付ヽ日花の其ろて其あ其ハと体は
の道頼も猫青まえし一ゆあの乱の心

ちれいこし　桜のちるを花いすとも
己の散るまさるいまだ萬古の例こ
貞亭翁師いひとへ季題の詞されい桜
八正花よまれんやるもその御名を捻る
らさうしもそれ
口伝日此句ふ去来此も浦尾を浴
是ーて心の蒙題甚く被一句といふ
さい心のちもや誹翁も流れ出ひて去
あるも自ら仕初めたるを寫わふび
さうれさる由也

卯十六　兼好の忌
荊や芒ふ雀躍もる
[illegible]、[illegible]い[illegible]の[illegible]
小鶴[illegible]、又、[illegible]
雀噌、[illegible]

小鶴[illegible]、[illegible]
久[illegible]ふ雀躍は江[illegible]と[illegible]め入
[illegible]如し雀ふ似[illegible]と
[illegible]　[illegible]山午[illegible]か譯れ
[illegible]春の[illegible]　春の[illegible]
雀の組合て[illegible]ても花の[illegible]
もとふ花[illegible]の[illegible]荊や芒ふ[illegible]
[illegible]雀[illegible]
[illegible]　[illegible]てよし

卯十九　[illegible]
[illegible]の[illegible]の詞を[illegible]あて
やうとやりず、[illegible]
とこし[illegible]
[illegible]の[illegible]の表裏とら[illegible]

義太夫節なれ 義太夫なれど
うらはなし 律義なる江戸
芝居ととも真似せず 武骨なり
近江人は山猿ならん御人の芸は
自分の為也、うちより世にあるべし
関東での 都らしからぬ芸なるべし

水口

[illegible]